

ナチスの学校田園寮（1933-1945）

—— ラガー化された錬成空間 ——

Schullandheim unterm Hakenkreuz (1933-1945)

小 峰 総 一 郎

目 次

は じ め に

1. ドイツ学校田園寮全国同盟の変質，解散

（1）予兆

（2）同盟の自主的解散，ナチス体制化

2. ナチス教育学化——ナチス教育システムと学校田園寮——

（1）「フライベルク覚書」（1936.1.6）とヒトラーの学校田園寮認知

（2）学校田園寮のナチス教育学化

3. ナチス学校田園寮の教育——核心としてのラガー——

（1）ラガーとしての学校田園寮 （2）ラガーの生活と教育

（3）学校田園寮教育者の研修

（4）学校田園寮船「ハンス・シェム号」

ま と め，文 献



学校田園寮運動の父

ルドルフ・ニコライ

(Rudolf Nicolai, 1885-1970)

（出所：Hilbert, S.: Lesebuch Umwelt
— Der Reformpädagoge Rudolf Nicolai.

2013, 表紙より）

は じ め に

学校田園寮（Schullandheim）とは，20世紀初頭にドイツの都市のギムナジウムが高原地帯や海浜地帯に保有（ないし賃借）した生徒のための田園宿舎である（今日まで続いている）。生徒たちはここに夏ないし冬に約2週間滞在し，教師・生徒・援助者の生活協同体を形成して土地の自然や田舎の人々の暮らしに触れ，これを深め，また学習とスポーツ，音楽，芸術活動を展開した。この「拡大された学校」は，都会のギムナジウムでは十全に実現できなかった「こころと体の全

体的発展」を補う場としてその意義が注目され、1920年代になると、エリート教育機関のギムナジウム（男子中等学校）のみならず、女子学校や国民学校（初等学校）も学校田園寮活動を展開するに至った。中でも、首都ベルリンは個々のギムナジウムの学校田園寮に加え、市自体がベルリン郊外に市立学校田園寮「《ベルリン若者村》ツォッセン」（„Berliner Jugendland“ Zossen）等を建設、そこで展開される豊かな活動は「ベルリン新教育」のユニークな一事例を形成したのである¹。

私は前掲書においてワイマール時代の学校田園寮を考察したのであるが、学校田園寮の後史については不明のままだった。その後私は新教育研究を離れ、少数民族教育研究を経てナチス教育研究に向かったのであるが、そこで逢着した〈ラガー教育〉に注目して調べて行くと、学校田園寮が「ラガー化された錬成空間」として再び私の眼前に立ち現れたのである。すなわち、ドイツの学校田園寮を束ねる「ドイツ学校田園寮同盟」はナチ党支配下に「一元化」（グライヒシャルトゥング Gleichschaltung 画一化、強制的同質化）され、学校田園寮はナチス教育理想〈ラガー教育〉の実験場となっていた。身体教育と共同性意識の形成をはかる田園寮学習は、都市の〈知性〉教育の対極にあるものだが、これがヒトラーの理想とする知性否定、身体錬成・ドイツ主義の教育に恰好の場を提供していたのだ²。そして学校田園寮の企画、運営は、ナチス革命とナチス教育に突き進む「ナチス教員連盟」と「ヒトラー・ユーゲント」が担っていたのである。

自然や郷土、身体・芸術、共同体や情念に注目する学校田園寮のコンセプトは、知性や外国文化、ヨーロッパ主義を否定して、若者を「血と土」、「祖国とドイツ性」に向けて「錬成」する「ラガー教育」と、ある意味で近しかったと言えるのであろう。それを検証、考察する必要がある——³。私はそのために、ナチ時代の学校田園寮が辿った歩みを大づかみしたいと考え、次のものにたどりついた。

König, Karlheinz:

„Schullandheimbewegung und Schullandheimpädagogik im Griff des totalitären Staates (1933 - 1945)“. In: Verband Deutscher Schullandheime (Hrsg.):

-
- 1 小峰総一郎『ベルリン新教育の研究』、風間書房、2002、第9章、参照。
 - 2 小峰総一郎「ラガー（Lager）——ナチス「キャンプと隊列の教育」の展開——」『中京大学国際教養学部論叢』第10巻第1号、2017/10；——『ナチスの教育——ライン地方のあるギムナジウム——』、学文社、2019、参照。
 - 3 江頭智宏はナチ時代の学校田園寮を詳しく研究しており、学ぶところが多い（例えば「1930年代ドイツにおけるシュールラントハイム」教育史学会『日本の教育史学』第46集、2003）。しかし私は、ナチ時代の学校田園寮の全体像を知り、それを通してワイマール時代の学校田園寮との「断絶」と「連続」、また学校田園寮の本質要素（功罪を含め）を考えてみたいと思うのである。

Schullandheimbewegung und Schullandheimpädagogik im Wandel der Zeiten.**Hamburg: Verband Deutscher Schullandheime e. V., 2002, S. 61-136.⁴**

ケーニヒ, カールハインツ:「全体主義国家 (1933-1945) 掌握下の学校田園寮運動と学校田園寮教育学」(ドイツ学校田園寮連盟(編)『時代の変転の中の学校田園寮運動と学校田園寮教育学』, ハンブルク: ドイツ学校田園寮連盟, 2002年, 61-136ページ)

ケーニヒの学校田園寮史研究は, まさにこのナチ時代の学校田園寮を問題にしている。そして, ドイツにおいてもナチ時代の学校田園寮の研究は初めてという⁵。私は上記の視点に注目し, ケーニヒの研究によりながら, ワイマール時代の学校田園寮がナチス教育体制にどう組み入れられ, ナチス教育の「典型」と位置づけられ, 遂には自らを「ナチス学校田園寮」と自認してナチス教育を牽引するに至ったのかを跡づけてみたいと思う⁶。

ケーニヒの論文構成は次の通りである。

- 4 本文献はドイツ学校田園寮連盟の記念出版物に収められた論文のようである。筆者(小峰)はその現物を探したが, 入手できなかった。幸いこの論文は, インターネットで公開されているのでそれによった。König, Karlheinz: „Schullandheimbewegung und Schullandheimpädagogik im Griff des totalitären Staates (1933 - 1945)”. In: Verband Deutscher Schullandheime(Hrsg.): Schullandheimbewegung und Schullandheimpädagogik im Wandel der Zeiten. Hamburg: Verband Deutscher Schullandheime e. V., 2002, S. 61-136. In: https://ns-in-ka.de/wp-content/uploads/2017/04/geschichte_1933-45_landschulheime.pdf 最終閲覧: 2018/06/29 (pdf 版)

ただ, これには欠落ページが散見される。それらにつき, グーグル社の書籍検索ページによって可能な限り補ったが, 完璧ではない。

https://books.google.co.jp/books?id=EL1Ft488hq0C&pg=PA61&lpg=PA61&dq=K%C3%B6nig+Schullandheim&source=bl&ots=47WdwqrNjq&sig=ACfU3U2Zejk4Yth9EPVqZp5F_hHqs5wcWg&hl=ja&sa=X&ved=2ahUKewiHgNv58-fnAhUVyosBHY9wCocQ6AEwDnoECAoQAAQ#v=onepage&q=K%C3%B6nig%20Schullandheim&f=false

最終閲覧: 2018/06/29

なおこの度検索すると, pdf 版は次のページでも閲覧できる。ただし欠落ページはそのままである。

<https://www.yumpu.com/de/document/view/21125668/schullandheimbewegung-und-ns-in-kade> 最終閲覧: 2020/02/27

- 5 Vgl. König, S. 61.

- 6 ケーニヒの論文を含む『時代の変転の中の学校田園寮運動と学校田園寮教育学』は, 「ドイツ学校田園寮連盟(登録協会)」(Verband Deutscher Schullandheime e. V.) の75周年を記念して出版されたものである。厳密には, 1926年に結成された学校田園寮の全国組織は「ドイツ学校田園寮全国同盟(登録協会)」(Reichsbund der deutschen Schullandheime e. V.: RSLH) といい, 今日の名称(「ドイツ学校田園寮連盟(登録協会)」(Verband Deutscher Schullandheime e. V.: VDS)とは若干異なっているが, 二つはドイツの全学校田園寮を束ねて活動してきた実質同一の組織である。注32参照。

筆者のケーニヒは, 別の文献に „Studiendirektor; Lehrbeauftragter für Pädagogik am Institut für Pädagogik der Universität Erlangen“ と紹介されている(Jahrbuch für Historische Bildungsforschung 6, Bad Heilbrunn: Klinkhardt, 2000, S. 169)。ケーニヒは, ギムナジウム教頭を経て現在はエアランゲン大学教員養成課程非常勤講師ということであろう。氏はナチ時代の教育を丹念に研究して成果を積み重ねている。

目 次 [構成, 章・節——小峰]

0. [はじめに] [S.]	61
1. 権力掌握前夜	61
2. ドイツ学校田園寮全国同盟 [Reichsbund der deutschen Schullandheime: RSLH, 1926 – 1936) の自主的一元化, 一元化, そして解散	64
(1) イデオロギー的政治的な自主的一元化	65
(2) 同盟政策, 組織面での一元化	73
(3) 解散	78
3. ナチス教員連盟 (NSLB) 内ライヒ学校田園寮専門部 (RSGSLH)	80
(1) 組織の歴史 (1933-1936)	80
(2) 管轄権をめぐる議論	86
(3) 学校田園寮支援組合とナチス教員連盟内ドイツ学校田園寮ライヒ作業委員会	87
4. 学校田園寮かユースホステルか——ライヒ青少年指導部との議論	91
5. ナチス教育システムの一部分として学校田園寮承認	104
6. [ドイツ学校田園寮の教育]	105
(1) ドイツ学校田園寮の教授コンセプト	105
(2) ラガーとしての学校田園寮	108
(3) 学校田園寮教育者の研修	116
(4) 学校田園寮船「ハンス・シェム号」	118
統計	122, 注 125, 文献 128

以下に私は、ナチ時代の学校田園寮の姿を、(1) ドイツ学校田園寮全国同盟の変質, 解散, (2) ナチス教育学化, (3) ナチス学校田園寮の教育, からオーヴァーヴューしてみることにする。

1. ドイツ学校田園寮全国同盟の変質, 解散

ワイマール時代の1926年, ドイツの学校田園寮を束ねる全国組織として「ドイツ学校田園寮全国同盟(登録協会)」(Reichsbund der deutschen Schullandheime e. V.)が結成された。理事長はブフホルツ市(ザクセン州)の実科ギムナジウム教師ルドルフ・ニコライ(Rudolf Nicolai, 1885-1970)である(ニコライについては2章参照)。

同盟は1930年, 学校田園寮を紹介する大判の報告書『全ドイツ学校田園寮同盟——イラスト入りハンドブック』を刊行した⁷。これは学校田園寮の実践と試行を写真入りで紹介し, 学校田園寮の意義を多くの父母, 国民, 教育関係者特に教育行政当局に知らせめ, 学校田園寮の普及発展をはかろうとしたものである。本書冒頭に, ニコライは大要次のように記している。

「学校田園寮は, 森林地帯や山岳, あるいは海浜で貴重な体験が出来るようにその場所も

7 Der Reichsbund der deutschen Schullandheime e. V. Illustriertes Handbuch. Kiel: Kunstdruck- und Verlagsbüro Kiel, 1930.

選りすぐられている。ここでクラス仲間の子どもたちは、大都市から離れ、ふつう数週間教師とともに生活するのである。そこには、体操やマラソンもあれば授業もある。お昼を食べてその後はお休み。また、作業やスポーツ、水泳、散策もある。夕食の後は楽しい歌の夕べ、演劇、朗読会。また、お話の集いも行われる。子どもたちはここでの一日を終えとくたくたになってベッドに駆け込むのである。

…この学校田園寮の教育的影響力は計り知れないほど大きい。彼らはここで初めて大きな協同体を作るのである。各人はこの協同体の下で自らを統御するのだ。また、彼らが教師とともに生活して、人格の教育がなされ、かつ自主的に判断する力が養われるのである。自然と共同生活〔と〕は互いに響き合い、すべてが都市の中の学校よりもはるかに容易にかつ成功裡に展開されることであろう。

…学校田園寮はまだ若い。1919年に20寮だったものが1929年には200以上になった。ハンブルク、ザクセンで運動が強固であり、ベルリン、ブレスラウ、ハノーファー、ライン・ヴェストファーレンがこれに続く。1926年にハンブルクでは90校、9,000人以上の生徒が学校田園寮を体験した。その体験日数は合計170,000日になる。

…学校田園寮の担い手は学校ではなくて親である。彼らが組合を作って、家庭と学校の橋渡しの共働を、すばらしい形で実現しているのである。ここには、教師と親の自由意志での犠牲的精神が強く表現されている。1,000名以上受け入れる寮もあれば30席しかない寮もある。国立の新築寮もあれば劣悪な田舎家もある。だが、必要な衛生環境は満たされている。ここに1-4週間滞在して経費は1-3.5RM〔1日当り〕である。これも父母、教師の協力のお陰である。

…この端緒についたばかりの学校田園寮の運動は、多くの困難に遭遇しているが、現代の力強い意志に支えられて、青年の内からの新生と、国民の新生とをもたらすことであろう…」⁸。

まことに的確にかつ大らかに、自然の中での教育の理想が語られている。私は、同書に寄稿した学校田園寮を邦・州ごとに次のように一覧整理した⁹。

8 Vgl. Nicolai, R.: „Vom Schullandheim in Deutschland“. In: a. a. O., S. 14-15. なお、小論においては、学校田園寮を扱った筆者（小峰）の前掲書と重なる部分があることをお断りしておきたい。

9 小峰『ベルリン新教育の研究』, p. 477. なお、同報告書を『ハンドブック』と略称する。

表1-1. 『ハンドブック』寄稿の学校田園寮（1930年）

番号	邦・州 名	学校田園寮数
	(プロイセン邦)	90
1	オストプロイセン州	2
2	グレンツマルク州ポーゼン・西プロイセン	1
3	ボンメルン州	3
4	ブランデンブルク州	2
5	大ベルリン市	15
6	上シュレジエン州	1
7	下シュレジエン州	7
8	シュレスヴィヒ・ホルシュタイン州	8
9	ハノーヴァー州	14
10	ザクセン州	9
11	ヘッセン・ナッサウ州	8
12	ライン州・ヴェストファーレン州	20
13	(バイエルン邦)	2
14	(ヴュルテンベルク)	1
15	(ザクセン邦)	34
16	(バーデン邦)	6
17	(テューリンゲン邦)	1
18	(ヘッセン邦)	2
19	(オルデンブルク邦)	1
20	(ブラウンシュヴァイク邦)	4
21	(自由ハンザ同盟都市ハンブルク)	38
22	ドイツ・オーストリア	6
合 計		185

(Der Reichsbund der deutschen Schullandheime e. V. Illustriertes Handbuch, 1930, S. 4-8 に基づき筆者作成)

このニコライが述べた自然の中の教育理想のもと、共和国末には全国約250寮¹⁰に及んだ学校田園寮は、ナチ時代になると、その内実を一変させるのである。

(1) 予兆

「学校田園寮——青年運動と新教育から生まれる。福祉モチーフ。心と体の健康。都市の子供に。

全国組織——：RSLH（Reichsbund der deutschen Schullandheime ドイツ学校田園寮全国同盟）

10 Scheibe, Wolfgang: „Die Schullandheimbewegung“. In: Scheibe: Die reformpädagogische Bewegung 1900-1932. Weinheim/Basel: Beltz Verlag, 1969; 6. ergänzte Aufl. 1978, S. 291.

●この学校田園寮が、1920年代後半になると、ギムナジウム教師たち好みのドイツ、民族、国家主義の、闘争的・軍隊的論理に重なる。ワイマール共和国末期に変容。

●特に国境地の学校田園寮に顕著である。東プロイセン、シュレジエン、ザクセン、ライン州、北シュレスヴィヒ。

学校田園寮活動+民族的国境地の活動。1927から——外地ドイツ人の苦悩状況に親しませる→国境地の脅威を身近にさせる→概念的に国境地と結合→精神主義的に国防準備。

・1929. 12. 3 ニコライ、ドイツ外国教育センター（1929ベルリンに設立）でこのことを報告している。

・ボイテンのカトリック高等実科学学校田園寮（国境地上シュレジエンに1930年開設）の例

内容：A. 歴史重視・総統畏敬 B. 全活動を「総統原理」で C. 民族愛の育成を、と。

・同盟指導部——民族的国家的三層（A. B. C.）を理解。→同盟会員の賛成。

1930ドレスデン大会（1930. 12. 12-16）

このときゲルトルト・ボイマー（Gertrud Bäumer: 1873-1954, 内務省学校制度・青少年福祉専門官）——「大衆的学校田園寮＝教育革新の一部」「上品な知識→誠実把握再定義を」と熱烈に反対陳述。

しかし大勢——民族的ドイツ主義的主張：郷土、大地、ドイツ主義、総統主義に立つ「共同体」と結合した学校田園寮活動、を採択。

||

国民的民族的同盟運動に大同一致

・背景：同盟加盟数増大

1925秋——120寮； 1932——250寮

・増大の供給源——大多数はギムナジウムと高等実科学学校の学校田園寮。

その教員の多数は民族ドイツ主義（volksdeutsch）志向であった。

||

国家主義的、民族主義的志操

若者を真正ドイツ思考に教育せんとする

→・スラブ人の敵対毒性プロパガンダに抗し、

・西方諸民族〔仏・英等〕に抗しうるように」¹¹。

1933年1月30日、ヒトラーはナチス政権を誕生させた（連立政権）。その後の3月5日、国会選挙でナチ党は得票率43.9%、連立与党の国家人民党と合わせて過半数の議席を獲得した。3月23

11 Vgl. König, S. 61-64.

日、国会議事堂「炎上」（2月27日）によりベルリン、クロル・オペラ座で開かれた国会は、ハーケンクロイツ旗と武装突撃隊の威嚇の下で「全権委任法」を可決、ナチス独裁が始まった¹²。

ドイツ学校田園寮全国同盟は、4月1日、いち早く「第三帝国の学校田園寮宣言」を採択した。学校田園寮はナチス体制と一体であると自己規定したのである。理事長のニコライは5月1日ナチ党に入党、ナチスに懐疑的な人物を理事会から追い、学校田園寮の目標はナチス教育観の下にあるとしたのだった。

「●1933年4月1－2日、ドイツ学校田園寮全国同盟大会（ハノーファー）

・「宣言」採択——1. 国家社会的推進力明示 2. 同盟はドイツ教育に寄与

∥

新教育の思想なし。ナチス学校化（＝「ナチス教員連盟」主張）に同調

・マッツドルフ（C. Matzdorff）退任——長く同盟の副議長、ベルリン・ニーダーシェーンハウゼン。ナチスと距離。宣言に最大反対

⇓

・新指導部——ニコライ、プレーマー、テオドール・ブレックリング（Theodor Breckling, プレーメン）。指導部の意見一致可能となる。イデオロギー的一元化へ

●ニコライ入党——ニコライ、1920年代は国家人民党系。ナチ党には入党せず。それが、1933. 3. 5の国会選挙後、党への偏見捨てて [1933. 5. 1入党]。

・1933. 4. 1——ナチス教員連盟加盟

・1933. 5. 1——ナチ党入党

↓

・「ナチス教員連盟」の主張する「社会的国家的教育事業の発展」を盛る宣言採択、公表。

12 石田勇治『ヒトラーとナチ・ドイツ』、講談社、2015、p. 153-166参照。

1933年4月1日宣言 「第三帝国の学校田園寮」

ドイツ学校田園寮は、10年以上の教育活動に基づき、国家的ならびに社会的目標の追求を行うものである。

家庭・学校の犠牲的活動協同体に支えられた学校田園寮は、身体を有能に、精神を活発に、そして人格を強固にすることをめざす。

また、全体の幸福のために個人の欲望は制限し、隣人への奉仕、工場労働、工作労働、ゲレンデスポーツ、民族・郷土科を直接体験で深めることをめざす。

青空授業——知を力能と意志に向かわせる。これはドイツ学校田園寮の教養・教育手段である。
ドイツ学校田園寮の目標——健康な生活の指導、同志の精神、社会的責任意識、民族政治思想、そして深い祖国愛である。

学校田園寮は民族と国家への責任感による教育振興を行う。

ドイツ学校田園寮全国同盟は、この意義深い社会的、国家的教育事業の発展に取り組むものである。

1933年4月1日

ドイツ学校田園寮全国同盟理事会

(König, S. 66.)

・4月1日宣言＝学校田園寮同盟の政治的立場表明

||

・学校田園寮同盟——ナチス教連へ一体化した。」¹³

当時、「ナチス教員連盟」(Nationalsozialistischer Lehrerbund: NSLB, 1929-1943) はナチ党員教員のみによる「ナチス革命」推進団体であった¹⁴。したがって、「ナチス教員連盟」の主張する「社会的、国家的教育事業の発展」を宣言に盛り、これを公にしたことは、同盟が「ナチス教員連盟」と一体であること、つまりナチ党と一体だということである。子どもの「こころと体の全体的発展」をめざす〈新教育〉を棚上げし、〈新教育〉派のマッツドルフを指導部から排除したのち、ニコライは、ナチス教員連盟、ナチ党に加わった。

ニコライはその後、ドイツ内務省文化局長ブットマン (Rudolf Buttmann: 1885-1947) と会談、覚書まとめを委託される (1933. 5. 3)¹⁵。さらに「ナチス教員連盟」代表ハンス・シェム (バイエ

13 Vgl. König, S. 65-67.

14 小峰「ナチス教員連盟について——組織ならびに教育活動——」『中京大学国際教養学部論叢』第12巻第2号, 2020/03, 参照。

15 ブットマンはローマ・ヴァチカンとのコンコルダート (政教条約: 1933年7月20日) 交渉に臨席している。

ルン文相)に書簡を送り「ドイツ教育の刷新に貢献する用意がある」むね表明している(1933. 5. 19)。いずれも、これまで副次的だった学校田園寮を、将来学校の本質要素とする;それも全学校の本質要素とするためであった。この精力的な折衝の結果、学校田園寮思想は新ドイツの教育事業に組み入れられることになるのである。以下、ケーニヒから。

- ・ 1933. 5. —「ゲレンデスポーツの前段としての学校田園寮」→各州文部省に要請
- ・ 1933. 5. 3——ドイツ内務省文化局長ブットマンと会談、覚書まとめを促される
- ・ 5. 19——ナチス教員連盟シェム宛書状、「ドイツ教育刷新に貢献する用意がある」
- ・ 7. ———ザールハーゲ (Heinrich Sahrhage, 1892-1969: ハンブルク)、同盟理事会で国防ゲレンデスポーツ可能と報告
- ・ 7. 15——ニコライ、内務省局長ブットマンと再び会談
- ・ 7. 18——ニコライ、ハンス・シェムと会談
- ・ 8. 14——内務省宛『学校田園寮覚書』

●ニコライ、内務省学校局宛覚書(1933. 8. 14)

内務省学校局宛覚書『覚書:ドイツ学校田園寮をドイツの学校制度の中に組み入れる』(Denkschrift: Einbau des deutschen Schullandheimes in das deutsche Schulwesen.)は、同年8月14日完成。それは、ヒトラーの『わが闘争』を引き、学校田園寮の教育はその精神に合致することを謳ったものである。曰く、田園寮の教育は健康の教育、身体教育、共同体教育、公民教育、民族政治教育であり、若者を土くれに導く精神鍛錬の教育なのだ、と。各論はつぎのごとくである;

- ①健康の教育——日々の鍛錬による民族の健康保持、健康意志の覚醒という、ナチスの謂う意味での「健康」の意義づけ。
- ②身体鍛錬——スポーツ、国民体操、水泳、散策、ゲレンデ活動は学校田園寮が愛好→将来の国防スポーツへ。加えて実践作業は将来の労働奉仕に有用。
- ③共同体教育——自分主義を克服、共存生活へ→同胞性、規律→「総統」(ヒトラー)を認識発見。
- ④公民、民族政治科——ワイマル体制の克服→総統につき知識学習へ。
- ⑤更なるプログラム——土への回帰 自然、故郷、民族→「血と土」からの再生=文明病から解放。国境地方の学校田園寮での風景体験→根源的生命力覚醒。これをドイツ人との一体感の中で。
- ⑥中心 →民俗学 (Volkskunde)、人種生物学、国家大変革史、天文学、男女特性別体育。
- ⑦オリエンテーリング、気象学ほか→国防スポーツに寄与する。
- ⑧女子→実践学。家事共同体、福祉→ナチス夫人像、英雄の母へ¹⁶。

16 以上 Vgl. König, S. 67-71.

同盟の提起したこの学校田園寮コンセプトを、ブットマンは、時代の方向性を指し示すものと捉えた。彼はニコライに、『覚書』を早速清書し各州に送付するよう指示した。

完成成った『覚書』を各州は歓迎した。そして、

●最初の反応——プロイセン文部省。1933. 10. 4→プロイセン文部省令発する。

プロイセンは学校田園寮令を文部省令として発令した。その内容は次のごとくである(大要)¹⁷。

プロイセン学校田園寮令 (文部省令1933. 10. 4)

U II C Nr. 2580

ベルリン西 8, 1933. 10. 4
プロイセン文部大臣 [ルスト]

ドイツの青年を郷土、民族、国家に組み入れ → 学校田園寮が適切。

・それは、同志生活と自己規律 → 大地の人々と結ぶ → 「血と土」を強化するからである。

1. 学校田園寮は民族政治教育目的。特に国境地の学校田園寮。その地の自覚青年と政治教育を。民族ドイツ人の精神で。
2. 学校田園寮を、一年の全期間活用へ。学校田園寮空間が不十分の学校は、他校との共同投宿を。学校田園寮の偉大な目的が、些細な法律問題や経費問題で挫折してはならない。
3. ゲレンデスポーツを。それらは、ヒトラー・ユーゲントのリーダーシップで展開する。
4. 座学も郷土に即し、入植の方法で。大地の農民の戦い→民族的、全人民の価値づけ → ナチ的、民族・国家秩序覚醒に至る。

委託を受けて (署名) ツンケル [学務局長 Gustav Zunkel, 1886-1934]

州知事各位殿

私は先にこのプロイセン「学校田園寮令」について調べ、それが、ナチス「キャンプと隊列のラガー (Lager) 教育」の象徴たる「民族政治科実習」(Nationalpolitische Lehrgänge: NPL) の起点となっていることを跡づけた。それがこの度、プロイセン学校田園寮令は、ニコライによる内務省学校局および「ナチス教員連盟」工作の結果纏められた「覚書」(1933. 8. 14) を受けての施策だということが明らかとなった。実は、10月4日のプロイセン「学校田園寮令」(1933. 10. 4) よりも前、1933年8月、プロイセン文部省ではベンツェ (Rudolf Benze) /シュトゥッカート (Stuckart, Wilhelm: 1902-1953) 起草による『中等学校制度における緊急改革——学校問題諸提案』がまとめられている。その中で、野外実習 (Wanderung) がこう述べられていた。

「…野外実習は、学問的というよりは身体・人格・「民族意志陶冶」(nationale Willensbildung) に資するものなので、半年に1回は2-3日の実習を実施せよ。ナチ突撃隊・親衛

17 Vgl. Deutsche Wissenschaft, Erziehung und Volksbildung, Jg. 1, H. 1, 5. 1. 1935, S. 6.; 小峰「ライン地方のあるギムナジウム (3)」『中京大学国際教養学部論叢』第8巻第1号, 2015/9, p.24-25.

隊・ヒトラー・ユーゲントおよびヒトラー少年団においては、青年の協同精神と〈民族政治活動（nationalpolitisches Streben）〉とがたいへん高度に統一されているので、特に数日間の野外実習の場合はこれらの団体と緊密に連携して実施しなければならない」¹⁸。

同年10月4日のプロイセン「学校田園寮令」（文部省令）は、一方でワイマール時代のリベラルな学校田園寮理想をヒトラー『わが闘争』の謂う錬成教育に転換させ、他方、この学校田園寮をドイツの学校制度の中に組み入れる起点でもあったのだ。今まで傍系であった「学校外」の教育活動が正系に入り込み、やがては全教育活動の牽引車になる第一歩だったと言えよう（ヒトラーは『わが闘争』で、学校一辺倒の教育を改め、その頂点に「軍」を置く錬成教育を構想していた）¹⁹。

(2) 同盟の自主的解散、ナチス体制化

さて、その後の複雑な経過を経て、同盟は1933年10月7－9日第5回大会（ハノーファ）で定款改正、「総統原理」ならびに「ナチス教員連盟」加盟の各提案を承認した。

その結果、同盟は法的高権を失い、1934年以後「ナチス教員連盟」が同盟を代表して当局との交渉を行うこととなる。

しかし公式に、「同盟」の解散が直ちに行われた訳ではない。伝統的教員組合が、ナチス教員連盟への強制的一元化（Gleichschaltung: グライヒシャルトゥング）に反対したためである。それらは、ブレーメンの高等実科学学校教師・ブレーメン市教育参事フォン・ホッフ（Bildungs-senator Dr. Richard von Hoff (1880 - 1945)）が代表を務める「ドイツ教育者連合」（Deutsche Erziehergemeinschaft: DEG II: 専門職性の高いギムナジウム教員の団体で、遅れてナチス教員連盟指導下に入った）、ドイツ中等教員連盟（Deutscher Philologenverband: ギムナジウム教員か

18 Scholtz, Harald: „Schule unterm Hakenkreuz“. In: Dithmar, Reinhard (Hrsg.): Schule und Unterricht im Dritten Reich. Neuwied: Luchterhand, 1989, S. 18. ナチス教育研究の泰斗ハラルド・ショルツ（元ベルリン自由大学教授、故人）は、この『緊急改革』は「… [その意図するところは、] すでに1933年以前からみられたナチス教員連盟等による学校制度のラディカル再編計画への憂慮を沈静化させるものであった。本指令は、のちに創設されたライヒ教育省の教育政策にも引き継がれたのである」としている（A. a. O., S. 20）。ナチスの権力掌握直後には、「ナチス教育学」が様々に探られていたと言えるであろう。

19 アドルフ・ヒトラー（Adolf Hitler: 1889-1945）が目指した教育（「ナチス教育」）は次の通りである。「民族主義国家の教育原則 ……民族主義国家は、……全教育活動をまず第一に、単なる知識の注入におかず、真に健康な身体と養育向上におくのである。そのときこそ第二に、さらに精神的能力の育成がやってくる。だがここでも、その先端には人格の発展、とりわけよろこんで責任感をもつように教育することとむすびついている意志力と決断力の促進があり、そして最後に初めて学問的訓練がくるのだ」。（アドルフ・ヒトラー、平野一郎／将積茂訳『わが闘争』下、角川書店、1973, p. 61）

「スポーツの価値 学校そのものは、民族主義国家においては、身体的鍛錬のためにきわめて多くの時間をさかねばならない。……」（p. 63）

「最後、最高の学校としての軍隊 民族主義国家においては、このように軍隊はもはや各人に進めや、止まれ、を伝えるのではなく、祖國的教育の最後、最高の学校とみなされる」。（p. 68-69）

ら成る、伝統的な中等学校教員連合)、そしてバイエルン男女教員組合 (Bayerischer Lehrer- und Lehrerinnenverein: BLV) だった。いずれも、メンバーの多くが大学出教員から成る独立性の高い教員組合である。そのため「同盟」は「自主的解散」の道を選んだ。解散の法的手続きが完了したのは1936年だった²⁰。

[自主解散告知=社団登記簿変更]	
区裁判所 ベルリン	1936年10月10日
[中略]	
社団登記簿における団体: ドイツ学校田園寮全国同盟 (Reichsbund der deutschen Schullandheime, 社団登記簿番号 Nr. 4995) は、1936年10月9日、以下の条項を掲載した:	
…第5段: 本同盟は1936年7月13日の会員総会決議により解散する。	
解散執行者は次の者とする: 一級教員 Dr. ルドルフ・ニコライ ブフホルツ市 (ザクセン州)	
	1936年10月9日行政記録第69冊 書記: リールシュ
[以下略]	(König, S. 79.)

この間に、いくつかの重大事態が起こっている。

- 1935. 3. 5——ナチス教員連盟議長ハンス・シェムの飛行機事故死



- ・1935. 12. 5——ヒトラー、後任議長のフリッツ・ヴェヒトラー (チューリンゲン文相) を
 - ①「教育者主庁」全国指導者 (Reichsleiter des Hauptamtes für Erzieher)
 - ②「ナチス教員連盟」全国統括代理 (kommissarischer Reichswalter des NSLB)

に任命。つまり、ナチ党—ナチス教員連盟間のパイプを一層強化したということであろう。

その結果、1936年7月、「ドイツ教育会館 (Haus der deutschen Erziehung: ナチス教員連盟中央本部)」(バイロイト) 落成式前日に開かれたナチス教員連盟大会で、後の同盟の「自主解散」が大きく進んだのである²¹。

- 学校田園寮とライヒ青少年指導部・ナチス教員連盟、ライヒ教育省との関係

それと共に触れておくべきなのが、学校田園寮と帝国青少年指導部 (代表: シーラッハ。「ヒトラー・ユーゲント」, 「ユースホステル」を指導)・ナチス教員連盟、そしてライヒ教育省との関係

²⁰ Vgl. König, a. a. O., S. 73-79.

²¹ Vgl. A. a. O., S. 79-80.

である。ここには青少年を「学校」内の閉じた存在とするのか、「社会」の中の存在（ヒトラーは
その頂点に軍隊をおく）としてナチス国家の一員に錬成するのか、という対立であった。

- ①「民族政治科実習」（プロイセン文部省令1933. 10. 4）をめぐる「ナチス教員連盟」、ヒトラー・
ユーゲントとルスト・プロイセン文部省（・ライヒ教育省 = 1934. 5. 1設置）との意見対立——
「民族政治科実習」を実施するとき、在来クラスを維持するか（ルスト = 教師中心の「拡大され
た学校」を構想）、それとも他校生徒との全く新しい「共同体」形成をめざすのか（ナチス教員連
盟は、ヒトラー・ユーゲントを「指導者」として新しいナチス国家共同体の基礎をなす青年の「同
胞共同体」を構想）。
- ②「民族政治科実習」の「場所」をめぐるユースホステルと学校田園寮との対立——
「民族政治科実習」の実施場所は、元来エリート学校から発した贅沢華美な学校田園寮か（学校田
園寮同盟）、質素・民衆的なユースホステルが望ましいのか（ユースホステル連盟）。
- ③そして「民族政治科実習」でめざされる理想——
疑似軍隊訓練としての「キャンプと隊列のラガー (Lager) 教育」か（シーラッハ、ナチス教員連盟）、
それとも都市の知性教育を補完する自然・郷土学習か（ルスト、プロイセン文部省・ライヒ教育
省）。

これはすなわち「ナチス教育」をめぐる思想対立であり、学校田園寮はその只中で自身の位
置を探って行ったのである。今、これらの詳細に分け入ることはできないが、結論だけ述べよう。

- ①「ナチス教員連盟」、「ヒトラー・ユーゲント」は「民族政治科実習」を専管できず、試行3
年でこれを中止（1936. 12. [3]）。ナチス教員連盟およびヒトラー・ユーゲントは、ルスト・
帝国教育省（1934. 5. 1設置）の〈学校〉緊縛論理を打ち破ることができなかった。しかしラ
イヒ青少年指導部は、直前の1936. 12. 1に「ヒトラー・ユーゲント法」を成立させている²²。
- ②シルマン率いるユースホステル連盟は、丸ごと「ヒトラー・ユーゲント」に組み入れられ
（「ケーゼン協定」Kösener Abkommen, 1933年3月12日）、シーラッハのライヒ青少年指導
部に下属した。同協定によりユースホステルは「ナチ組織」とみなされ、1933年12月から行
われたプロイセン、ライン州の「民族政治科実習」は、学校田園寮ではなくユースホステル
で実施されている〔ユースホステルの優位性〕²³。
- ③〈学校〉緊縛の「民族政治科実習」は中止された。しかし、ナチス社会全体での〈ラガー化〉

22 小峰「ライン地方のあるギムナジウム(3)」『中京大学国際教養学部論叢』第8巻第1号、2015/9、参照。

23 同上参照。

は一層広範に推し進められ (中でも「教員ラガー」), 「キャンプと隊列のラガー (Lager) 教育」は, ナチス教育, ナチス教育学の中心となった²⁴。

学校田園寮の解散と, その後のライヒ青少年指導部, ナチス教員連盟との関係をケーニヒは次のように構図化している。上記諸事態の結果をよく表現していると言えるだろう²⁵。

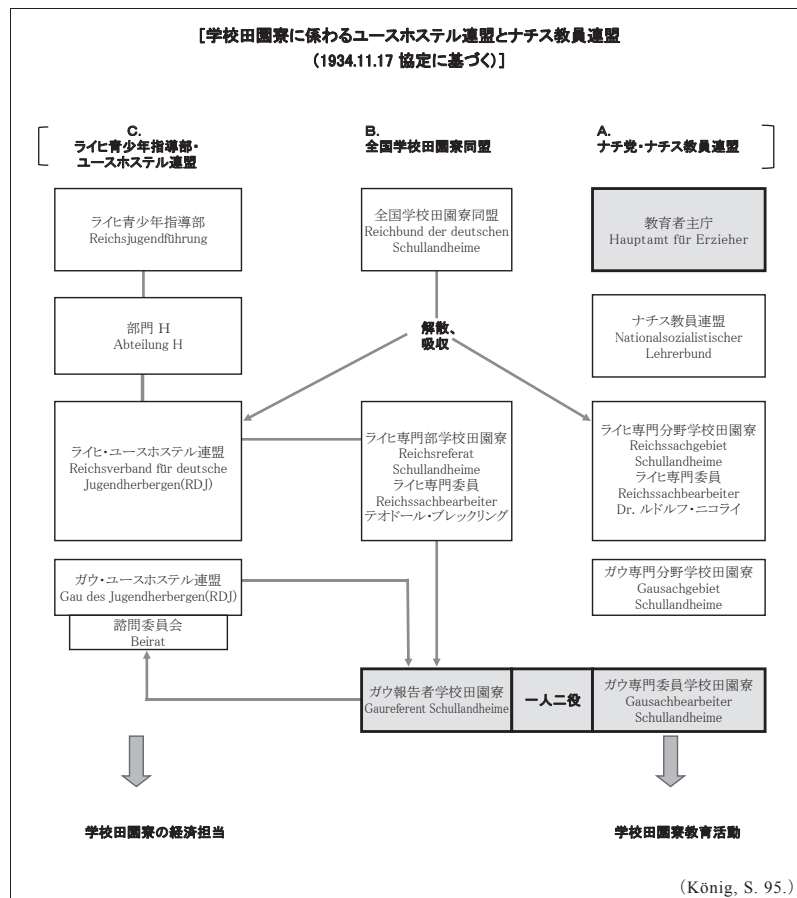


図1-1. 学校田園寮に係わるユースホステル連盟とナチス教員連盟との関係構造
(1934. 11. 17協定に基づく)

24 小峰「ラガー (Lager) —— ナチス「キャンプと隊列の教育」の展開——」『中京大学国際教養学部論叢』第10巻第1号, 2017/10; 小峰「ナチス教員連盟について——組織ならびに教育活動——」『中京大学国際教養学部論叢』第12巻第2号, 2020/03, 参照。

25 Organisationsstruktur und Zuständigkeiten vom Reichsverband für deutsche Jugendherbergen(RDJ) und dem Nationalsozialistischen Lehrerbund (NSLB) nach der Vereinbarung zwischen dem Reichssachgebiet Schullandheime (RSLH) und dem RDJ sowie dem NSLB-Reichssachgebiet Schullandheime und Reichsjugendführung, Abteilung H, vom 17.11.34 (Entwurf des Verfassers). A. B. C. の説明は小峰。Vgl. König, S. 95.

なお、「ナチス教員連盟」(Nationalsozialistischer Lehrerbund: NSLB, 1929-1943)は、1929年に、「ナチス革命」をめざすナチ党員教員が設立したラディカルな教育団体である(設立者・初代議長ハンス・シェム Hans Schemm, 1891-1935)。1933. 1. 30のナチス政権(連立)誕生で所期の目標を達成したのち、連盟は、党員外の一般教員の個人加盟を促進するとともに、他の教員団体を解散・傘下化して(グライヒシャルトゥング Gleichschaltung: 画一化, 強制的同質化), 大学教員も含む約30万名の団体となる(1937年には学校現場の97%の教員が「ナチス教員連盟」所属となっている)²⁶。しかし党員外教員の参加によりナチ党方針の不徹底が懸念されたため、ナチ党全国指導部は1934年9月、党としてのナチス教員連盟指導機構「教育者主庁」(Hauptamt für Erzieher, 1934. 9)を設立、連盟議長でナチ党ガウ長官のシェムが、これを一人二役(Personalunion)で指導することとなった。連盟の組織構造は、ナチ党に準じて「全国(ライヒ)」・「ガウ」・「郡」体制であったので、「教育者主庁」はそれらの各々上部に置かれた。このタテの「ナチ党-教育者主庁-ナチス教員連盟」とヨコの「ナチス教員連盟」機構との関係はまことに複雑であるが、私はこのたび、インターネットサイトから次のような判読可能な組織構造図を入手した。ナチ党・教育者主庁とナチス教員連盟との関係を理解するのに有効であるので提示しておきたい²⁷。

26 Rolf Eilers: Die nationalsozialistische Schulpolitik : eine Studie zur Funktion der Erziehung im totalitären Staat. (Staat und Politik, Bd. 4), Köln: Westdeutscher Verlag, 1963, S. 74.

27 „Organisationsschema des Hauptamt für Erzieher und des NSLB.“ (aus: Organisationsbuch des NSDAP, München 1936. 255) In: [https://www.historisches-lexikon-bayerns.de/Lexikon/Nationalsozialistischer_Lehrerbund_\(NSLB\),_1929-1943](https://www.historisches-lexikon-bayerns.de/Lexikon/Nationalsozialistischer_Lehrerbund_(NSLB),_1929-1943) 最終閲覧: 2020/03/07

先に私は、主としてファイテンに依ってナチ党とナチス教員連盟との関係を考察したところであるが、ナチ党とナチス教連を結ぶ教育者主庁(Hauptamt für Erzieher, 1934. 9)そのもの、教育者主庁を介してのナチ党とナチス教員連盟との関係、またライヒ-ガウ-郡レベルでの両者の関係構造はよく分からなかった(小峰「ナチス教員連盟について」『中京大学国際教養学部論叢』第12巻第2号, 2020/03, 参照)。本図は1936年におけるものであるが、それらの関係を理解するのに大変有効である。

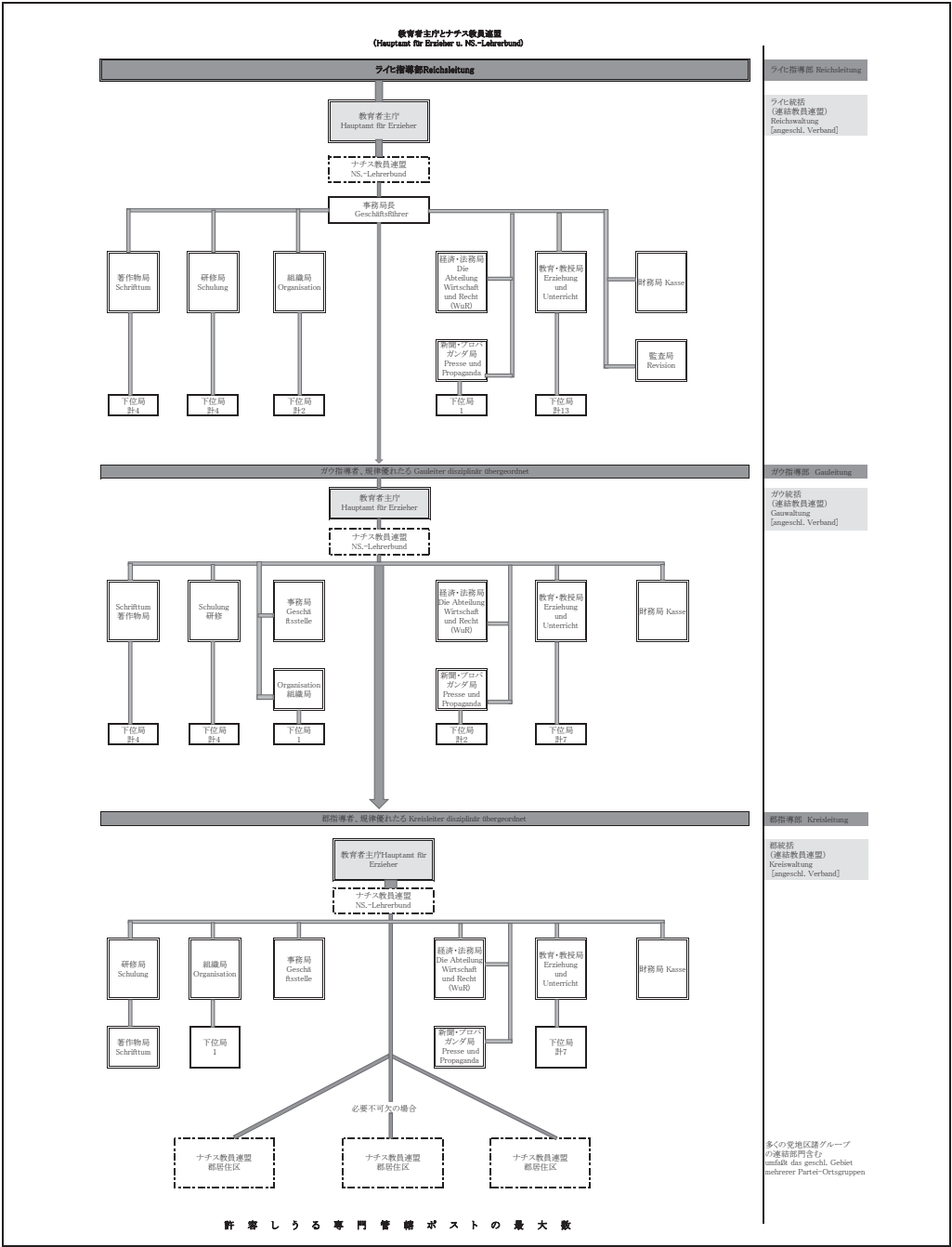


図1-2. ナチ党・教育者主庁とナチス教員連盟との関係（1936年）

2. ナチス教育学化——ナチス教育システムと学校田園寮——

表2-1. 学校田園寮数の推移 (1925-1960)

年	1925.10	1929. 4	1931. 12	1933. 1.	1935. 12.	1936. 1. 6	1936.8末	1937初め	1936/37末	1938. 12.	1942	大戦中	1947	1960
数	120寮	200寮	251寮	250寮	258寮		300寮		324寮	378寮	435寮	・学童疎開 ・国防基地 ・野戦病院 ・焼失	116寮	360寮
						↑		↑						
摘要	学校田園寮同盟設立				中等:150 初・職: 106	「フライベルク覚書」	18,000床	ヒトラー認知	新設40含む。閉鎖不詳					(西ドイツ)

(Vgl. König, S. 123-124.)

●宿泊数も増大

年	1931/32	1937/38
泊数	1,219,550	2,516,325

(Vgl. König, S. 123-124.)

さて、次に学校田園寮と「ナチス教育学」との関係を問うことにする。

上に示したのは、学校田園寮の数の変化をケーニヒの書からまとめたものである²⁸。ここから分かるのは、

①ワイマール時代の〈新教育〉の場としての学校田園寮が、ナチ時代となり、ナチスが〈新教育〉を否定したにも関わらず学校田園寮は増加しているということである(250寮から最終的には430寮以上に増加)。

②そして増加の端緒に、「フライベルク覚書」(1936. 1. 6)、ヒトラーによる学校田園寮の「認知」(1937初め)があるということである。

特にヒトラーの学校田園寮「認知」が、寮数の増大と学校田園寮のナチス教育学化に決定的な要因だったと言えるだろう。

ナチス体制の成立に当たり、ニコライならびに学校田園寮同盟理事会は学校田園寮の「ナチス教育」適合要素を強調・定義づけることによって学校田園寮の存続をはかった(法人は解散)。それがやがて、ヒトラーの「認知」を受けて、学校田園寮は自らの教育コンセプトを再定義するようになる。つまり、学校田園寮における「キャンプと隊列」のラガー(Lager)教育こそ「ナチス教育学」の本質であると確信し、ナチス国家の教育を牽引するわけである(少なくとも主観的には)。これはまさに学校田園寮の形態並びに本質の転換だと言える(主として1930年代中葉以降)。

28 Vgl. König, a. a. O., S. 123-124.

このように押さえた上で以下ケーニヒの叙述をたどってみよう。

(1) 「フライベルク覚書」(1936. 1. 6) とヒトラーの学校田園寮認知

●1935/36年

ナチス教育システムの中の田園寮議論。きっかけ——「フライベルク覚書」

「フライベルク覚書」

・相互対立——①ドイツ学校田園寮全国同盟 ②ナチス教員連盟 ③ヒトラー・ユーゲント。

・問題視——ライヒ教育省

↓

・これに触発されて「フライベルク覚書」

内容はハンス・シュトリッカー [ナチス教員連盟教育教授主局長 (パイロイト)] の議論と一致²⁹。→ニコライ後押し。ナチス教育を担うとさせ
たし。

[A.] パンフレット。1936. 3フライベルク覚書公刊 (覚書を採録したもの)。

[B.] 教育イデオロギー的明示化。関係局内決定へ。

1936年 7月11日 ナチス教員連盟大会 (パイロイト「ドイツ教育舎」落成式 (7. 12) 前日)

・フライベルク・アンハルト州首相覚書——ナチス教員連盟大会時, 学校田園寮ライヒ専門官特別会議開かれる →覚書推進

●1937年初め

・ヒトラー, 覚書に満足, 喜ぶ。(覚書は1936年末, プロイセン・ライヒ教育相ルスト宛提出)

29 ハンス・シュトリッカー (Hans Stricker ? - ?) ——彼はナチス教員連盟本部 (パイロイト) の教育教授主局長という。その人物像を調べたがよく分からない。ただ, クラースの研究には, 1937年4月にパイロイトの「ドイツ教育会館 (Haus der deutschen Erziehung: 中央本部)」で行なわれた第1回近代語ライヒ専門官全国ラガーでのあいさつが引かれている。大要次のようである:「…教育教授主局長シュトリッカー (党員) が開会を宣言。その強調点は以下のごとく; …たしかに校種・カリキュラム・教育目標が実際の授業活動編成の前提条件だ。がしかし, 教育と授業の担い手は教師である。ドイツの学校を新生させる前提は, [これまでと違う] 新しい教育者 (Erzieher) だ。それはすなわち, 彼が国家社会主義の志操と行動の指導者 (Führer), 手本 (Vorbild) ということである——文化・精神生活の全問題におけると同様に——」と (Kraas: Lehrerlager, S. 247)。「教育者」(Erzieher) とは「ナチス世界観の体现者」であって, それまでの単なる「教師」(Lehrer) ではない。これについては, 小峰前掲「ナチス教員連盟について」参照。なお, シュトリッカーの下で実施された学校田園寮教育者研修課程 (Schulungslehrgang) については, 第3節で触れる。

- ヒトラー、「ドイツ学校田園寮はナチス教育システムの一部である」旨を表明
- ・この表明なければ——ヴェヒトラーは、青少年指導部（シーラッハ）並びに教育省（ルスト）の攻勢に対して反論できなかったであろう。
- ヒトラーの「推賞」は学校田園寮にとり追い風。すなわち「学校田園寮＝総統の意思」³⁰

ライヒ教育大臣ルスト宛「フライベルク覚書」がヒトラーに回覧された。そこには、ヒトラー『わが闘争』の教育理想が現実となって描かれていたのである。そこでヒトラーは、全ライヒの学校田園寮に支援を約した（→学校田園寮の新設、拡大へ）。学校田園寮教育の「ナチス教育学化」の条件が開かれたと言える。

いま、この「フライベルク覚書」（1936. 1. 6）の概要を示すと次のごとくである³¹。

「学校田園寮と青少年教育」

アンハルト州首相フライベルクのライヒ並びにプロイセン教育大臣宛覚書（1936. 1. 6）[大要]

…これまでの諸革命は、指導者が闘争目標よりも政治権力の獲得を重視したために挫折した。これに対して総統〔ヒトラー〕は教育を重視する。100年の持続をする新しい教育の確立へ。若者の教育に共働者が欠かせない——すなわち家庭、学校、ヒトラー・ユーゲント、そして軍である。

……

総統〔ヒトラー〕は人格と意志の訓練を求める。偉大な民族が求めるのは、誠実、犠牲精神、口の固さを備えた若者だ。学校が現下のカリキュラムよりも重視すべきはこれである。半端の平和主義者よりも完全なるドイツ人の育成を。学校で民族共同体に向け育てられた者だけが完全なドイツ人たりうる。これは、学習学校では絶対にできないことだ。…

1. 学校田園寮——民族共同体基礎の共同体体験をさせるところ。まずクラス→教師は「指導者」となる。生徒に自発促す→真に慕われる存在へ。このような共同体となり、相互信頼と人格の尊敬、同僚性ができたとき →真の指導者となる。

…

4. 学校——肉体鍛錬を行わなくてはならない。

5. 学校はまた民族政治教育を行う——共同体の中で同胞性を訓練し、…民族と故郷との結合を発見し、…共同体への誇りを育てる。ここから善と勇気をもって共同体に仕えようとする気持ちが育つのだ。

6. 第三帝国＝農民国家だ。総統曰く、自覚が大事と。農民の如く考え生活する→学校はこれに寄与する。学校田園寮——健康、精神、心性、性格の諸欠陥が治療される。読書・散歩の中ではなく、自己の観察と体験による。→大地との結合。自分の畑、庭を。自分の動植物を。農民のするがごとくに。これを将来強化せよ。自ら紡ぎ、自ら収穫する→再び土へ。

田園寮はこれら困難な課題に立ち向かう。アンハルト州では、すでにこれに取り組んでいるところである。…

(König, S. 98-99.)

30 Vgl. König, S. 104-105.

31 Vgl. a. a. O., S. 98-99. なお同覚書はすでに前稿で示したところであるが、本節の主題上これを欠くことはできない。訳文をいま少し明瞭にして再録する所以である。小峰前掲「ナチス教員連盟について」参照。

(2) 学校田園寮のナチス教育学化

アンハルト州首相フライベルクの「覚書」(1936. 1. 6)は、上記のように学校田園寮がヒトラーの教育理想に合致していることを述べていた。

ところで旧学校田園寮同盟のルドルフ・ニコライが勤務していたのは、このアンハルト州の隣のザクセン州だった。彼はザクセンのアンナベルク実科ギムナジウム教員で、同校で彼はチェコ国境の山地に「イエーンシュタット (Jöhstadt) 学校田園寮」を築き、ここで創意的な宿泊実践を展開していた³²。フライベルクが、ザクセンのそのような事情を特に重視していたのかどうかは定かでない。

ともあれザクセン州では、ニコライの積極関与のもとに学校田園寮の「ナチス教育学化」が見られたのであった。以下、これも踏まえて、ライヒレベルでの学校田園寮の「ナチス教育学」化をたどってみる。

...

- ・1933年末、学校田園寮同盟指導者ニコライがまとめ、1934年初め、ザクセン学校田園寮作業チームの名で刊行；

●『学校田園寮投宿展開提言』 („Vorschläge für die Gestaltung des Aufenthaltes in Schullandheime“)

- ・学校田園寮教育の主目標――

「ドイツの若者の身体、精神、人格を耕し→ナチス精神で未来を形成しうるようにする」

↓

32 学校田園寮運動家ルドルフ・ニコライ (Rudolf Nicolai, 1885-1970) の横顔は概要次のごとくである。

シュレジェン生。父は牧師。グライフスヴァルト大で神学研究、ライプツィヒ大で教職準備。1909シュレジェンの教会詩人シュモルクの研究で学位。ザクセン州アンナベルクの实科ギムナジウム教師。ワンダーフォーゲル運動に参加。第一次世界大戦出征 (1915-17)。フランス戦線で重傷後、1917年再びアンナベルク教師に戻る。

ここで新教育に積極参加。読書教材共著 (1923)、またイエーンシュタット Jöhstadt 学校田園寮創設に関わり学校田園寮運動を展開。ザクセン中等教員組合で学校田園寮グループを指導。1925年10月、ベルリン中央教育研究所で「田園寮」(Landheim) テーマの会議を組織、学校田園寮報告行。ここに於て「ドイツ学校田園寮全国同盟」(Reichsbund der deutschen Schullandheime e. V.) 設立、議長となる。

ナチズムの時代に彼は、生存は保持できたが、学校田園寮活動は著しく後退した。加えて各所でナチストによる濫用に遭遇する。ニコライは1933年5月ナチ党に入党。学校田園寮全国同盟は1934年自壊したが、ニコライは1935年10月まで学校田園寮ライヒ専門領域長 Sachbereichsleiter の名誉職保持。

第二次世界大戦で息子ルディ、並びに娘婿を失う。戦後、ソビエト占領地区の非ナチ化で教職を追われる。それ以来、西ドイツの田園寮運動指導者ザールハーゲ Heinrich Sahrhage 並びにヴィルヘルム・ベルガー Wilhelm Berger と共に学校田園寮活動を行う。ベルガーは1953年、[西独側] マールブルクで新しい組織「ドイツ学校田園寮連盟」 „Verband deutscher Schullandheime“ 設立。

ニコライは晩年教会活動に参加、また引き続き西ドイツの学校田園寮指導者たちと連絡を取ったが、東独では当時学校田園寮活動は殆ど役割なし。ニコライはその死まで、イエーンシュタット寮の荒廃を見ざるを得なかった。http://saebi.isgv.de/biografie/Rudolf_Nicolai_ (1885-1970) 最終閲覧：2020/02/27。

・ザクセン文部省

これにザクセン州の文部省が賛同，具体化

- 1934年5月12日，「学校田園寮ラガー整備令」（Verordnung zur ‘Einrichtung von Schullandheim-Lagern’）発布。

||

- ・学校田園寮＝ナチス教育システムの一部として「ナチス国家の若者への要請」担う

ポイント：①厳格な生活秩序 ②簡素な生活 ③身体，性格の鍛錬 ④民族スポーツ活動
⑤郷土愛 ⑥自然と民族結合——これらを教授化する。

ここには，1920年代の新教育概念はなかった——子どもからの教育，全体にわたる教育，感性体験・精神作業，子どもと青年の人格的並びに社会的発展，それらは問題とされなかった。

反対に「整備令」は，これらに代わって

- ①ナチス国家の政治目標を配置し，
②学校田園寮教育学をイデオロギー的に改造（ideologisch überformen）したのである。

- ・ニコライはこの要請を直ちに理解し，これを移植した。その証左；

- 『覚書：ナチス教育に関係づけた学校田園寮の本質，立場，教育価値』（‘Denkschrift: Wesen, Stellung und pädagogischer Wert des Schullandheims in Beziehung gesetzt zur nationalsozialistischen Erziehung’, 1934）——ニコライがナチス教員連盟ザクセン・ガウ用に執筆

↓

- ・[ナチ党] ザクセン・ガウ教育者主庁＝「ナチス教員連盟」ザクセン・ガウ長ゲブファート（Arthur Göpfert）——これをさらに推し進め，学校田園寮は，ナチス国家のために同志として行動できる人間，祖国と大地を結びつけるという最重要の課題を担うものとした（『ナチス教育の場としての学校田園寮の意義』Die Bedeutung des Schullandheims als nationalsozialistische Erziehungsstätte, 1934）³³。

33 アルトゥール・ゲブファート（Arthur Hugo Göpfert, 1902-1986）——醸造業主の子。小学校教師。ナチ古参党员，ナチス教員連盟員。ザクセン文部大臣（「大臣」タイトルなしで）。大学教授のヒトラー忠誠宣言（1933.11）起草。ザクセン・ガウ庁長官として教育者主庁を指導。ライヒ国会議員。戦後西ドイツで暮らす。ナチ時代の編著『ドイツ人労働の記念碑』はソ連占領地区内で禁書指定。
 („Arthur Hugo Göpfert“ [https://de.wikipedia.org/wiki/Arthur_Hugo_G%C3%B6pfert_\(Politiker\)](https://de.wikipedia.org/wiki/Arthur_Hugo_G%C3%B6pfert_(Politiker)) 最終閲覧：2020/03/10.)

●ライヒレベルでの学校田園寮のナチス化

1933年10月4日の「プロイセン学校田園寮令」→1934年12月14日、これを全ライヒ化。教育相
ルスト「[[ライヒ] 学校田園寮令」

↓

- ・学校田園寮——ナチス教育家とナチス教員連盟が絶対条件とする「新民族主義学校」(neue
völkische Schule) へ。

||

健康と授業のみならず、むしろ民族政治目標

ポイント：

- ①国境地の田園寮 ②国境地域の「ドイツ人」自覚生徒との交流 ③民族ドイツ人精神で
の政治共同体教育 ④ゲレンデスポーツ——ヒトラー・ユーゲント並びに親衛隊による。

- 学校田園寮ライヒ専門委員ニコライ、ならびにナチス教員連盟ライヒ執行部（バイロイト）に
よる学校田園寮像——最重要目標

- ①身体陶冶——身体陶冶は次世代の義務。よき遺伝資質保存のため

- ②民族・人種・男女特性——精神陶冶+政治・イデオロギー教育

教授上の観点：国境問題，農村史，民族性，民族習慣，人種問題

男女別対応：国防兵士（男），犠牲的母性（女）

- ③学校田園寮活動——同志性。自己を超える必然性自覚，民族政治的共同教育を。最初の機
械的共同体→ナチ原則によってイデオロギー的に基礎付けられた生活共同
体へ転換（Umwandlung）

- ・田舎体験——共同体を通して→若者を「血と土」へ回帰させるのだ。³⁴

ここにおいて、学校田園寮はかつての〈新教育〉を放棄，ニコライとナチ党・ナチス教員連盟，
そして学校田園寮運動に積極的に取り組んできたザクセン州，プロイセン州の手によって〈ナチ
ス国家化〉，〈政治化〉したのであった。

ナチ党とナチス教員連盟によってナチス国家の「新民族主義学校」(neue völkische Schule) に
組み入れられた「ナチス学校田園寮」の組織構造は、次のごとくである〔主要部のみ〕³⁵。

³⁴ 以上 Vgl. König, S. 105-107.

³⁵ „Organisationsstruktur des Gausachgebietes Schullandheim und Schülerwandern im NSLB, Gau Hamburg
(Stand 1934), Grafische Darstellung entworfen nach der Übersicht 'Nationalsozialistischer Lehrerbund, Gau-
stelle für Schullandheime und Schülerwandern', in: AVSLH-Kasten V.I./ NSLB, Akte Nationalsozialistischer
Lehrerbund, Gau Hamburg (Entwurf des Verf. = ケーニヒスによる) König, S. 85. なお、本図もすでに前稿
で示したところであるが、本節の主題上これを欠くわけにはいかない。小峰前掲「ナチス教員連盟につ
いて」参照。

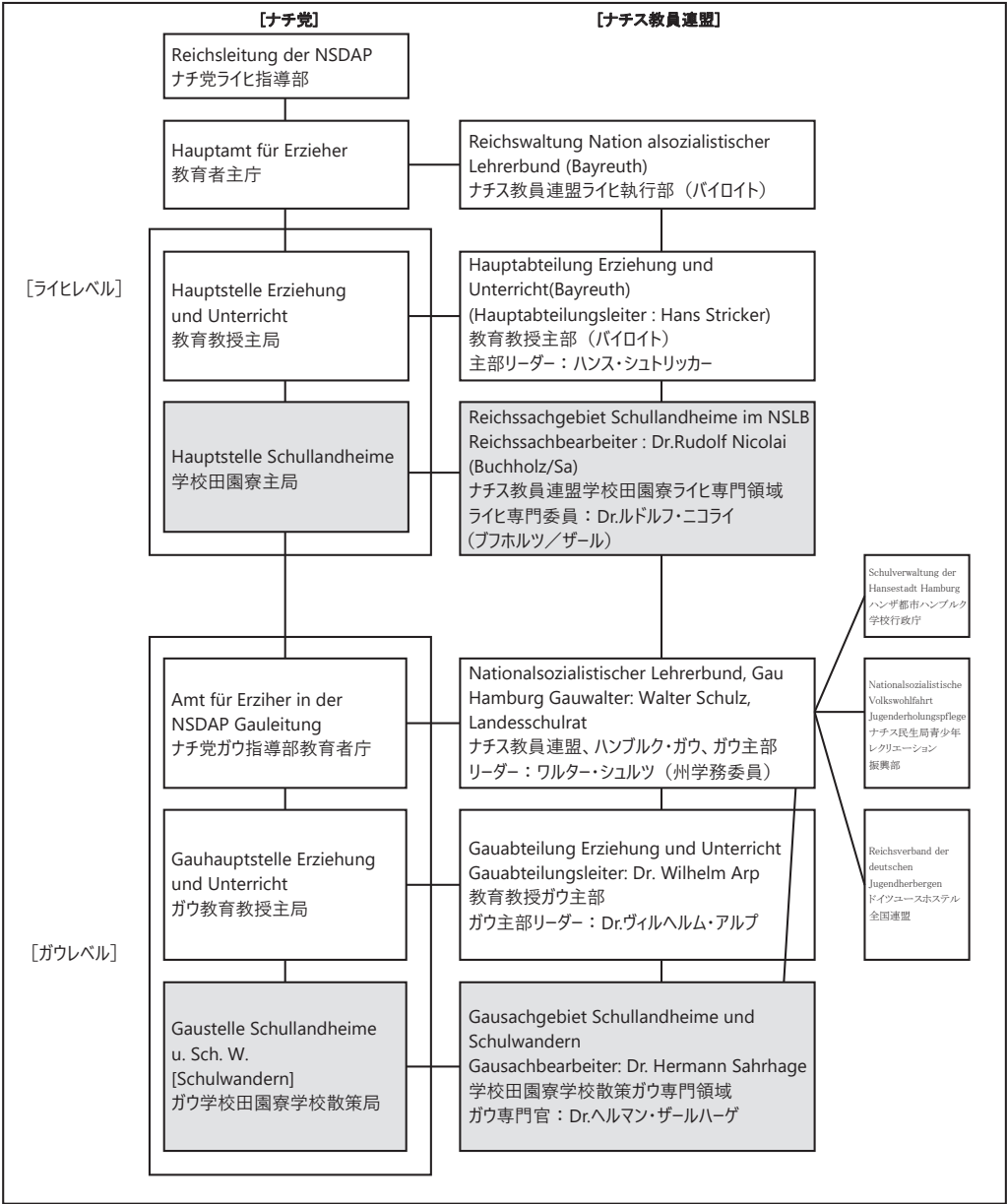


図2-1. 学校田園寮とナチ党・ナチス教員連盟 (主要部。網掛け, 説明は小峰)

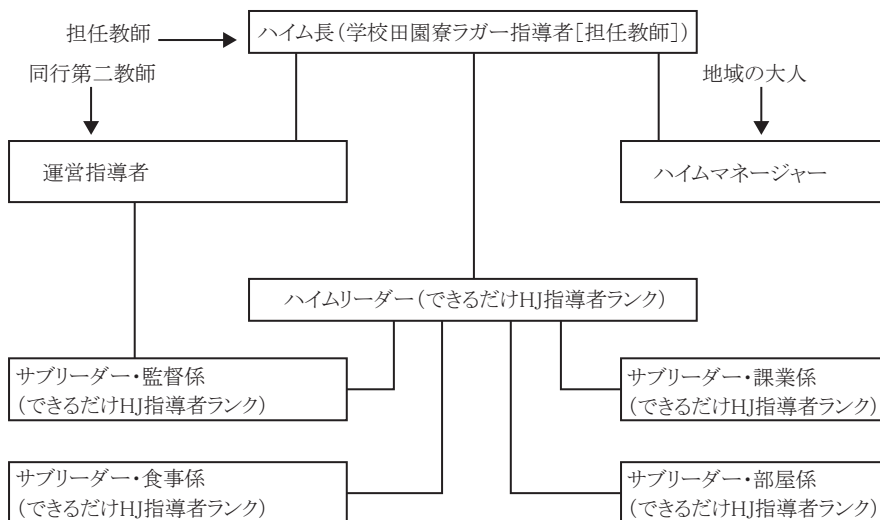
3. ナチス学校田園寮の教育——核心としてのラガー——

「ナチス学校田園寮」の教育は以上のような経過の上に展開される。ここではその特徴的な形姿を寸描してみることにする（「ナチス学校田園寮」と表現したのは、ワイマル時代の〈新教育〉の学校田園寮との違いを意識したものである。行論において特に「ナチス学校田園寮」と言わなくとも、それは〈ナチス国家化〉〈政治化〉した「ナチス学校田園寮」を指している）。

（１）ラガーとしての学校田園寮

まず触れなくてはならないのが、学校田園寮はラガー（Lager）に変容した、すなわち「キャンプと隊列」のラガー教育の場（＝「ナチス学校田園寮」）となったということである。

これを象徴するのが、ラガーの組織体制である³⁶。これはケーニヒがアンハルト学校田園寮令（1934年）と服務規程補足（1936年）に基づいて作成したものであるが、上意下達の「指揮命令－服従」体系、言うなれば小軍隊秩序と言える。ワイマル時代の、学校田園寮滞在それ自体を楽しむというものから、「ナチスト（ナチス主義者）錬成」目的のキャンプトレーニングというものに変じている。教師－生徒関係は、生徒の自主性を尊重する水平的な関係ではなく、クラス教師を「指導者」とする「指揮命令－服従」の垂直的体系である。



(出所: アンハルト学校田園寮令(1934年)と服務規程補足(1936年)に基づきKönig作成。König, S. 108)

図3-1. ラガーとしての学校田園寮（1936年）

以下にケーニヒの説明を要約紹介する。

...

- ラガーとしての学校田園寮——1933年から。ナチスイデオロギー義務化。人種自覚→共同体に奉仕できる人間に教育。

[これまでの] 家庭・学校——家庭：両親の生活領域。宗教，社会，ときに体制批判もあり

- これに対して学校田園寮——共同体教育では個人を超える。ときに教化あるも。

個人，家族 ↔ 寮共同体＝共同体の中で共在。労働・祝祭・生活を通して。家庭的存在は捨て，共同体に奉仕する→ナチス世界観と結合した教育土壌となる。

- ナチス世界観と結合した特別空間——生徒ら，世界観教育システムの中に組み入れられる。

好ましくない教師の悪影響→排除

→ナチス教員連盟，教師派遣。かかる教育空間＝ラガー。1933年から。

- ナチス教育形式としてのラガー。厳格な服務規程とフライベルクの講演内容

→『茶色本』(Braunbuch)にまとめられた(『学校田園寮ガウ専門委員バイロイト研究大会1937』Arbeitstagung der Gausachbearbeiter für Schullandheime in Bayreuth, 1937)。これは，ライヒ学校田園寮専門員ザールハーゲの広報担当者を通じて購入可。

- 学校田園寮の編成

ハイム長(担任)——運営指導者(第二教師)・ハイムマネージャー(土地の人——地域パイプ作れる人)で構成される。

ハイム長——指導者原理を体現する。

- ・生徒からリーダーを選出する ①ハイムリーダー(1名)→サブリーダー(多数。監督・食事係・課業係・部屋係)である。これらはほぼ毎日交代である。ハイムリーダーとサブリーダー：ヒトラー・ユーゲントの指導者ランク。

(2) ラガーの生活と教育

次に，学校田園寮での「教育」である。それは，生活と教育(というよりはむしろ訓練)が一体化したものであった。

あるギムナジウム学校田園寮の日課(1935. 11.16-26)

07:00 起床
07:10 早朝スポーツ
07:35 旗掲揚

08:00	朝食
08:30	戸外散策
12:00	昼食
12:30-14:00	休息
14:00	スポーツ
15:30	コーヒータイム
16:00-17:00	学習
17:00-18:00	遊び
18:00-18:30	コンパス行軍
18:30	パンタ食
19:30-21:00	ゲレンデ練習, 演劇プログラム
21:00-21:30	日誌記入
22:00	消灯ラッパ

(König, S. 110.)

「あるギムナジウム学校田園寮の日課 (1935. 11. 16-26)」が物語るように、狭義の「学習」(Schulung) は午後16:00-17:00の1時間のみ。それに対して「戸外散策」(Wanderung) が午前中殆どすべて、08:30-12:00の間、昼食まで3時間半に亘って展開される[同表参照]。「ラガー」においては、「教育」は個別〈内容〉ではなく、個別〈内容〉を含みこむ「〈形〉そのもの」、**「生活形式」そのもののものだ。**

学校田園寮に到着して、係が決められ共同生活の開始。それから毎日「07:00起床」から「22:00消灯ラッパ」に至るまで、軍隊的規律の田園寮生活が2週間展開され、彼らは(男子のみ)やがて田園寮を後にする——この生活全体が「教育」であり、中軸にナチズムイデオロギーが貫かれている、それがすなわち「ナチス学校田園寮」における教育(錬成)なのだった。

日課のポイントに、「神聖化」された儀式＝「寮旗昇降礼」が朝、夕配置されている。

… [あるギムナジウム学校田園寮の日課に基づき…]

●日課は厳格に定められた。

起床から消灯ラッパまで、軍隊的で、かつ典礼化、シンボル化された様式である。

この全体としての〈ラガー教育〉を表す多くの記録あり。それは、学校田園寮に参加した多くの生徒、教師、学校田園寮指導者、校長たち、そしてまた、ナチス教員連盟幹部並びに教育大学男女学生たちのものである。これら「学校田園寮ラガー」日課枠組の中で、整列、寮旗掲揚・降納、シュプレヒコール唱和のような疑似軍隊のナチズム訓練が展開される。

●寮旗昇降礼

寮旗昇降礼について（大要）

学校田園寮旗の昇降は、これまで各校バラバラに行われてきた。この統一化を推奨する。『ヒトラー・ユーゲント服務規程』に倣い次のように行うものとする；

寮旗昇降礼は毎朝晩行う。

1組3人部隊で行進集合。旗に向き1列または四角となる。

ヒトラー・ユーゲント部隊登場。ヒトラー・ユーゲント→サブリーダー→リーダーへ、あいさつ・応答。「ハイル・ヒトラー」「ハイル・ヒトラー」。目をまっすぐに。

2名のヒトラー・ユーゲントが旗を支え、号令「旗揚げ注視、右向け右！」ないし「左向け左！」。そして指導者「上がる旗に注目」。

旗揚げ中特別朝礼なきときは、1名のヒトラー・ユーゲントが旗への誓い、または『ヒトラー・ユーゲント旗歌』第1節歌唱。他はこれを静聴。

指導者、旗の前に進み出て右手で敬礼。「寮旗注視——直れ！」。旗揚げ完了→「退場！」。

夕べの儀式も同様だが、旗への誓い、歌は通常これを欠く。旗の降納に合わせて「寮旗降納→右向け右！」ないし「左向け左！」→「降納完了！」

「学校田園寮各日寮旗昇降指示」（『学校田園寮』1936/8, 63ページ）
(König, S. 113.)

これらはナチ的思想世界を表すものであった。様式は1936年までは各校任せ。しかし1936年から統一化。寮旗礼は『ヒトラー・ユーゲント服務規程』に基づくと定められる。統一化され出版された『寮旗掲揚唱和文』は「学校田園寮ライヒ専門委員 Dr. ニコライ」の共同制作になる。

寮旗掲揚唱和文 [大要]

共同制作 ライヒ専門委員 Dr. ニコライ

旗を高く、手を高く。我ら、自らをドイツに、祖国にささげる。

旗よ、我ら汝に誓う。こころ新たに。永遠の誠実もてここに直立して。我らたとえ消え失せようとも。

同胞心、規律、厳格——それが我らが徳。旗よ、我ら汝に誓う。汝、我らに力を与えるもの。

わが民族の成立は、厳しく、犠牲甚大、困難な時代だった。だが総統は我らに防衛を呼び掛ける。我らみな、汝に、ドイツ人の祖国に永遠の誠実をあらわす。

強くあれ、純粋であれと旗は我らに教える。永遠の民族たれ、総統への忠誠に生きよとも。

祖国ドイツは生きねばならぬ、たとえ我ら没すとも。

旗こそ我らの聖と生。我が犠牲、無言の勇者。人は旗に誓ってベストを尽し、若者はなお死も犠牲もいとわない。

ニコライの寮旗掲揚唱和文（出所：『学校田園寮』1936年7/8月号）
(König, S. 112.)

「ナチス学校田園寮」では、生活と教育がこのように紀律化されたわけである³⁷。

●体鍊→国防スポーツ

寮に即した伝統的な学習とともに、1933年（遅くとも）から体鍊（körperliche Ertüchtigung）が、「国防強化」（Wehrhaftmachung）視点のもと、学校田園寮教育の中心に。

国防、ゲレンデ活動、障害物走、国防的性格のものから →有刺鉄線下の匍匐前進、柵越え、コンパス行軍、射撃：これらはイデオロギー、政治国防教育である。

それらを示す多くの証拠あり。1934年から定期的に、田園寮滞在終了後にハイム長報告書作成。これらはナチス教員連盟学校田園寮郡専門委員から学校田園寮ガウ報告専門委員に送付される。

体鍊強化——1938年のオーストリア併合（1938年3月）、ズデーテンランド領有（1938年10月）の前には、体鍊の国防スポーツ化が強化されている。1939年からは戦争準備教育。国防能力、国防意識がますます重要性を増す³⁸。

学校田園寮の生活図と説明 [不鮮明]

田園寮は身体活動が主体であるので……繰り返して。

…

図「競技、戦争遊び」——笛・山野探訪・馬跳び・堀越・有刺鉄線くぐり・柵越え・水泳。

…

…これらの報告を…。

（出所：『学校田園寮』（1937年5月）

（König, S. 111.）

・体験を通しての精神教化（インドクトリネーション）——これらは国防準備教育ではなく、

①「国防能力あるドイツ人」を教育目標とする精神教化（インドクトリネーション）。

・これを体験教育により、生活の中で形成すること

||

②「ラガー共同体」を通して「血と土」イデオロギーの具体的体得、
が目指されたのだ³⁹。

37 以上 Vgl. König, S. 108-112.

38 Vgl. König, S. 113-114.

39 Vgl. König, S. 115-116.

ここに見られるのが「ラガーとしての学校田園寮」である。

それは、ワイマール時代の学校田園寮を「形」と「内容」において似て非なるものに作り変えたと言える。つまり、ワイマール時代の学校田園寮は田園滞在とそこでの生活それ自体を楽しむという〈内容〉であり、そこでの水平的な関係の中で結果的に協同体が醸成された。これに対し、「ナチス学校田園寮」は、指揮－服属のタテ関係の外形と、規律、身体錬成、「国家社会主義」（ナチズム）という「内容」から成るラガーを若者に「協同体」と実感させ、彼らを自覚的に大民族共同体に組み入れて行ったのである。これを分節化すると次のようになる。

- ①指揮－服属のタテ関係の「形」の中で生活、課業、儀式全体が規律化される。
- ②成員はこの規律化された空間を、自他を超えた「協同体」と実感する⁴⁰。
- ③祝祭的規律、体錬とナチスイデオロギー教育はこの小「共同体」を大「共同体」（ドイツ民族共同体）に結合させ、成員は主体的に大民族共同体に加わって行く。

||

ラガーとしての「ナチス学校田園寮」

「キャンプと隊列」のラガー (Lager) たる「ナチス学校田園寮」において、若者は生活と儀式、学習、「体錬」・「国防スポーツ」に〈主体的に〉取り組み、自ら進んで「祖国」の兵士たろうとするのであった。



国防教育の一環としての騎馬戦 (König, S. 94.)



射撃練習 (S. 110.)

40 筆者（小峰）はこのような観点をクラスの研究から学んだ。Kraas, Andreas: „Den deutschen Menschen in seinen inneren Lebensbezirken ergreifen — Das Lager als Erziehungsform, 2011.“ In: Klaus-Peter Horn/Jörg-W. Link (Hrsg.): Erziehungsverhältnisse im Nationalsozialismus. Bad Heilbrunn: Klinkhardt, 2011; —: Lehrerlager 1932-1945: politische Funktion und pädagogische Gestaltung. Bad Heilbrunn: J. Klinkhardt, 2004; 小峰, 前掲「ラガー (Lager)」参照。Lager (ラガー) のイメージとしては、キャンプ、合宿などとともにロシア語の「ラーゲリ」(лагерь——ソルジェニーツィンの小説で描かれた) のようなものが思い浮かぶ(ナチ時代の「強制収容所」は Konzentrationslager である)。戦前日本の「総力戦体制下」における教師再教育「錬成講習会」は、ドイツのラガー「錬成」と重なるものが多い。寺崎昌男, 戦時下教育研究会編『総力戦体制と教育: 皇国民「錬成」の理念と実践』, 東京大学出版会, 1987, 参照。

(3) 学校田園寮教育者の研修

「ラガーとしての学校田園寮」教育者は、ナチズム世界観を体現する「指導者」でなくてはならない。ナチス教員連盟はそのために研修プログラムを編成し、パイロイトの「ドイツ教育会館 (Haus der deutschen Erziehung: 中央本部)」で研修を実施している。ケーニヒは、ナチス教員連盟教育教授主局長ハンス・シュトリッカー (Hans Stricker, ?-?) 作成の「研修課程学習計画」を挙げて、「ナチス学校田園寮」指導者研修内容を述べている (これは1937年1月17-24日実施のものである)。

ナチス教員連盟学校田園寮ライヒ専門部 (Reichsfachgebiet Schullandheime im NSLB)

研修課程 (Schulungslehrgang) 学習計画

1937. 1. 17-24, パイロイト「ドイツ教育会館」にて

1. 学校田園寮運動の基本思想
 - a) 教育勢力としての家庭, 学校, ヒトラー・ユーゲント
 - b) 共同体による共同体への教育
 - c) 新帝国学校としての訓育学校
2. 学校田園寮とその組織
 - a) 学校田園寮の担い手としての学校協会 (Schulgemeinde)
 - b) 学校田園寮の経済問題
 - c) 学校田園寮の健康問題
3. 学校田園寮滞在の内容構成
 - a) 世界観深化
 - b) 身体教練
 - c) 教材づくり
 - d) 村の生活, 農民性, 民俗学
4. 学校田園寮とその任務
 - a) 学校田園寮教育の必然性, 独自性
 - b) 共同体生活
 - c) 民族政治教育
 - d) 祝祭造形, 音楽教育

ハンス・シュトリッカー (Hans Stricker: 教育教授主局長)

(出所: 『学校田園寮』 SLH, 8/36, Nr. 10, 1936. 12, S. 116.)

(König, S. 115.)

1936. 1. 28-29

NSLB「ガウ長官, ライヒ専門長官, ライヒ専門官」会議 (第1回) ——ドイツ教育舎 (パイロイト) にて開催。ヴェヒトラー指導下。ここにニコライ報告 (10分程度):

●将来の学校田園寮長 (ナチス国家精神で働く決意の者) ——特別専門訓練必要。世界観基礎に立ち, 学校田園寮教育者となるため。

前史

- ①シエム事故死（1535. 3. 5）後、コルプ（Max Kolb）、ヴォルフ（Carl Wolf）提言
- ②ライヒ教育省／ベンツェ（Rudolf Benze）→HJ 排除し教育省，教師主導に回帰策す
- ③体験教育を中心とする，ナチス共同体教育めざす＝ナチス教連

1936. 5. 14第一準備告知

ガウ教育担当局との協力→学校田園寮指導者研修課程

内容

- ①世界観的基礎に立つ専門訓練
- ②実習体験

形式・内容なお未形成

→カール・ヴォルフ（Carl Wolf, ? - ?）補足（1936. 5. 14）「統一基準まで課業は猶予」

- ・これに対し数人は無視ないし受け入れず（←ニコライの新たな言〈1936. 8〉「①将来特別な継続教育が導入される ②専門講習はすでに複数ガウで実施された」

1936年中頃

概念確定→10月初め，ライヒ専門部，講習計画策定→「ドイツ教育舎（パイロイト）にて行なう」（『学校田園寮』SLH, 8/36, Nr. 10, 1936. 12, S. 116. 上掲のもの）⁴¹

（4）学校田園寮船「ハンス・シエム号」

「ナチス学校田園寮」は国境地を取り分け重視した。プロイセンの学校田園寮令（文部省令1933. 10. 4）は、「学校田園寮は民族政治教育目的。特に国境地の学校田園寮」と述べて、生徒に他民族による侵略の脅威を実体験させ、民族的自覚の高揚を謳った⁴²。そしてすでにワイマール時代末期には、ギムナジウム教師たちが「ドイツ，民族，国家主義，闘争的・軍隊的論理」を抱くに至っていたこと，そして現実に国境地の学校田園寮——東プロイセン，シュレジエン，ザクセン，ライン州，北シュレスヴィヒ——では、生徒に外地ドイツ人の苦悩状況に親しませ、国境意識を身近にさせる「精神的国防準備活動」が展開されていたことに触れた〔3章（1）節〕。

ドイツの国境は内陸部から海岸線にまで及んでいる。この国境地帯を船で周遊し、国境を知り国境地方の人々と交流して民族的課題を自覚させる——その船自体がまさに「移動ラガー田園

41 Vgl. König, S. 115-117.

42 Vgl. Deutsche Wissenschaft, Erziehung und Volksbildung, Jg. 1, H. 1, 5. 1. 1935, S. 6.

寮」になるという「学校田園寮船」構想が生まれ、具体化した。ナチス教員連盟初代議長ハンス・シェムの名前を冠した、「学校田園寮船ハンス・シェム号」(Das Schullandheimschiff 'Hans Schemm')である。

この奇抜な「学校田園寮船」の成立と「ハンス・シェム号」の航行は以下のごとくであった。

・「移動田園寮構想」

①1930/31——ドイツユースホステルのマルク・ブランデンブルク・ガウ、ハーフェル川のボートを「水上ユースホステル」に改造

②1934——ハンブルク、船の寄贈を受ける。土地密着型「水上ユースホステル」開始



●ザールハーゲ、アイディア。ハンブルクの譲渡体験 →ナチス教連教育教授局受け止め、「移動学校田園寮構想」に発展。但しこれの具体的効果については不明

●具体化へ

1935. 1. —— 「バイエルン東ガウ」指導部とナチス教員連盟「教育教授主局」

→ハンス・シェム [ナチス教連議長] へ具申 →シェム絶賛 →具体化研究

・建設判断——ヒッツラー・ヴェルフト (ナチス教連ライヒ指導部)。早速建設に着手。全長31mの船は70名生徒を収容可能。半年で築造。この最中にナチス教連議長ハンス・シェムの事故死 (1935. 3. 5) →「ハンス・シェム号」と命名。

1935. 11. 8——11. 15——1男子学級を乗せてドナウ川処女航行

●1936. 5. から定期的周航 (「帝国周航」Deutschlandfahrt)

第1回——1936年5月から、19周航。乗船合計：生徒1,020, 教師34

第2回——1937年。ヒトラー、ドイツ教育会館 (Haus der deutschen Erziehung：中央本部、パイロイト) 訪問し移動学校田園寮船を称讃 (1937. 7. 30) →8日間周航を計20回。乗船合計：生徒1,050, 教師34。忘れられぬ旅。遊覧でなく →思想教育, 世界観, 政治教化の旅。[周航表参照]

第3回——1938. 5. 16-10. 15. オーストリア併合 (1938年3月) 後実施。ブレーメンからウィーンへ [停泊, 入換しながら]。政治デモ [併合反対] に遭う。12ガウから合計20クラスが各8日間ずつ周航。今回の周航では、北西 [ブレーメン] - 南東 [ウィーン] 統一ボン [満艦飾] を張り渡す。ここに全ガウの参加が見られたのが象徴的であった [ガウ旗の掲揚か]。

第4回——1939年。今回もデモに遭う。周航目的地：ズデーテンラント (=ミュンヘン協定

1938. 9. 30でチェコ・ズデーテン地方併合)

- ・周航「効果」——ナチス政策〔併合〕の民族的解釈。現地の人々をナチス「民族共同体」の一員として知り合い、実体験する。

- ・新造船計画——1936年末から。収容力の問題あり。
- ・特徴——周航は、祝祭化、疑似軍隊訓練、組織化原理：これら伝統的な〔陸上の〕田園寮形式を踏襲+船という一体条件下で、教授形式として強化、完成化。



他面、伝統的田園寮の諸側面（身体強化、共同体、現地に親しむ）→限定条件下で周到設計＝ナチス教員連盟の田園寮形式。

- ・費用問題——少ない負担（1.25RM/1日、8日間合計10RM）

バイロイトのナチス教連ライヒ財政より支出あり。乗員水先案内人費用その他。

- ・1941年——中止。戦争激化→戦闘機による低空攻撃の恐れ→中止へ。宣伝よりも人命。

●後史——シェム号の運命、1945年以降不明⁴³。

●就航例（1937年）

1937年の就航表は次のごとくである⁴⁴。

43 Vgl. König, S. 118-121.

44 König, S. 119.

表3-1. 学校田園寮船「ハンス・シェム号」周航表（1937年）

[実施回]	[期間]	[航路]	[参加ガウ]
nr. 01	(1937) 5.14-5.20	ハンブルク／ベルリン	ハンブルク
nr. 02	5.21-5.27	ベルリン／ブレスラウ	ベルリン
nr. 03	5.28-6.3	ブレスラウ／グライヴィッツ／オーデルベルク／ブレスラウ	シュレジエン
	6.4	休息、バッテリー充電、洗濯、乗組員自由日	
nr. 04	6.5-6.11	ブレスラウ／シュプレー森／ベルリン	シュレジエン
nr. 05	6.12-6.18	ベルリン／シュナイデミュール／フランクフルト（オーデル）	ベルリン
nr. 06	6.19-6.25	フランクフルト（オーデル）／スヴィーネミュンデ／カミン／シュテットティン	クールマルク [マルク・ブランデンブルク]
	6.26	休息、バッテリー充電、ほか	
nr. 07	6.26-7.3	シュテットティン／ベルリン／マゲデブルク	ボンメルン
nr. 08	7.4-7.10	マゲデブルク／ハレ／国境 [チェコ国境か]／ドレスデン [ザーレ川・ラベ川を遡航か]	マゲデブルク－アンハルト
nr. 09	7.11-7.17	ドレスデン／ハンブルク	ザクセン
	7.18-7.26	ハンブルク、ヒッツラー社でモーターのオーバーホール	
nr. 10	7.27-8.2	ハンブルク／キール／ハンブルク／リュエベック	東ハノーファー
nr. 11	8.3-8.9	リュエベック／ハレ	シュレスウィヒ－ホルシュタイン
nr. 12	8.10-8.16	ハレ／ベルリン／フランクフルト（オーデル）	ハレ＝メルゼブルク
	8.17	休息、バッテリー充電、ほか	
nr. 13	8.18-8.24	フランクフルト（オーデル）／シュヴェリン（メクレンブルク）	クールマルク [マルク・ブランデンブルク]
nr. 14	8.25-8.31	シュヴェリン／ベルリン	メクレンブルク
nr. 15	9.1-9.7	ベルリン／ブレスラウ	ベルリン
nr. 16	9.8-9.14	ブレスラウ／国境 [上シュレジエンか]／ブレスラウ	シュレジエン
	9.15	休息、バッテリー充電、ほか	
nr. 17	9.16-9.22	ブレスラウ／ベルリン	シュレジエン
nr. 18	9.23-9.29	ベルリン／国境 [ダンチヒか]／フランクフルト（オーデル）	ベルリン
nr. 19	9.23-9.29	フランクフルト（オーデル）／ドレスデン	クールマルク [マルク・ブランデンブルク]
nr. 20	10.7-10.14	ドレスデン／ハンブルク	ザクセン

（出所：『学校田園寮：ナチス教員連盟教育者主庁学校田園寮ライヒ専門領域月報』第9年度（1937年）第5号，通巻第56（5月）号，S. 59f. [König, S. 133.]）



学校田園寮船「ハンス・シェム号」(König, S. 118.)

ま と め

以上、ケーニヒの詳細な学校田園寮史研究(1933-1945)の何点かに注目しながら、ナチ時代の学校田園寮、すなわち〈ナチス学校田園寮〉の形姿を私なりに描いてみた。

その結果、ここに見られるのが、ワイマール時代の学校田園寮を改造(überformen)した「ラガーとしての学校田園寮」であることが分かった。

ワイマール時代の学校田園寮は、〈知性を通しての人間解放〉をめざす都市の学校の補完物として、学校田園寮滞在それ自体を楽しむ——そこには本質的に、都市の学校を離れ田園寮生活を通して育まれる協同性、自然や社会への積極的働きかけ、健康・スポーツ・文化促進、そして連帯意識や友愛感情といった情念的要素の追求が原理としてあった——というものであった。「ナチス学校田園寮」は、この本質を篡奪し、学校田園寮の形、内容を変質させて「ナチスト(ナチス主義者)錬成目的のキャンプトレーニングの場」＝「ラガーとしての学校田園寮」に転換させたわけである。

この〈ナチス学校田園寮〉とはすなわち、次のように纏めうる。

- ①「田園滞在それ自体を楽しむ」学校田園寮から、指揮－服属のタテ関係の「形」が作り上げられ、生活、課業、儀式全体が紀律化される。
- ②「形式」の神秘化、儀式の祝祭化により、各人はここを、自他を超えた「協同体」と実感する。
- ③郷土学習によって各人はドイツ民族生成の土壌(Boden)を見出し、彼らは血で(Blut)これら先祖と繋がる一員であることを自覚する。
- ④ドイツ民族の指導者(Führer, ヒトラー)ならびに「国家社会主義」(ナチズム)への情念的一体感を形成。また「体錬」を軸に、若者の国防意識・国防能力形成をめざす。
- ⑤成員はこの小「共同体」を通して大民族共同体(ドイツ民族共同体)に自覚的に加わって行く。
- ⑥この〈ラガー教育〉は「ナチス教育学」の中心コンセプトとなって、ナチス社会とナチス教育を牽引した——特に「ナチス教員連盟」によって——

ワイマール時代の〈新教育〉の多くが——ベルリンの生活協同体学校・世俗学校新教育、またノイケルンでフリッツ・カルゼン(Fritz Karsen, 1885-1951)により試みられた初等・中等学校複合における新教育実践、ベルリン市と一体となって展開された児童保護・障害児教育・教員自己教育(「ディースターヴェーク大学」)・世界新教育運動との連帯など、そしてハンブルク、ブ

レーメン、フランクフルト等における新教育⁴⁵——、ナチ時代に攻撃、否定され終焉を迎えたのに対し、なぜ学校田園寮はナチ時代にも「継受」されたのか。これについて私は今、次のように考えている。「継受」には、次の諸要因があった。

- ①ニコライらの転向。学校田園寮存続への働きかけと「変容」工作。「ナチス教育学」との「共通性」に注目した学校田園寮教育学の再定義
- ②これに対するナチス教員連盟、フライベルク、ルスト、そしてヒトラーの共感と支持
- ③そして根本に、学校田園寮が備える内部原理とナチズムとの「親近性」

私は特に③に注目したい。すなわち、学校田園寮は、本質要素として以下のものを備えている。すなわち、

- ・都市と離れた田園立地
- ・寝食を共にする生活共同体
- ・非日常の時間、空間
- ・知性発展というよりもスポーツ、健康、郷土学習の優位、情念的要素の優位

である。これらの要素は、いずれも仮構の「ナチス教育学」に通じるものであり、ナチス教育の側はこれらに注目したのである。

そもそも「ナチス教育学」には内実が欠けていた⁴⁶。ナチスト（ナチス主義者）は、ヒトラー『わが闘争』の教育言説を殆ど唯一の拠り所としてこれを一面的に跪拝し、ワイマール共和国とその教育・学校を否定、家庭・学校・社会（軍を頂点とする）から成る全体社会の教育を創出しようとした。そのとき〈知性を通しての人間解放〉の対極にある（ないしそれを補う）学校田園寮が注目された。これに学校田園寮の側の屈服と存続願望とが呼応し、ナチス体制化して学校田園寮は「ナチス学校田園寮」へと変質した。かつての自立的な学校田園寮は、いま、ナチズム錬成、

45 シュミットは、ワイマール時代の末にはドイツ全土で——都市、そして農村部においても——新教育が展開されていたことを示している。Vgl. Schmitt, Hanno: „Zur Realität der Schulreform in der Weimarer Republik“. In: Rülcker, Tobias/Jürgen Oelkers(Hrsg.): Politische Reformpädagogik. Bern: Peter Lang, 1998, S. 627.

46 ヒルバートは、次のように述べている。

「特別なナチ的教育理論は存在していなかったので、ナチスによっても支持された学校田園寮構想は、性格陶冶と関連づけて目標追求された。身体陶冶、同胞性、協同体教育、民族性というような教育内容は、国家社会主義者〔ナチス〕の教育イメージと一致したのである。」 Hilbert, Stephan Friedrich: Lesebuch Umwelt - Der Reformpädagoge Rudolf Nicolai. Norderstedt : Books on Demand, 2013, S. 93.

国防教育、民族教育、「血と土」への回帰といった〈目的〉に下属する存在となったのである。かつて戦前に、村上俊亮はナチスの教育をこう述べていた。

「…教育の目的に就ても自律的人格の陶冶を目的とする従来の人文主義的自由主義的教育思想を排し、教育は何よりもまづドイツの土と血とを尊敬し、あらゆる思考と行為とを通して国民全体に奉仕し、ドイツの歴史と運命とのために己を犠牲にするドイツ人を養成しなければならぬ。そのためにナチスは家庭と学校との他にヒトラー青年団に重要な教育力を求めんとする…」⁴⁷。

今回私は、ケーニヒを繙くことで「ナチスの学校田園寮」の本質をある程度見通すことができた。ナチス第三帝国という、〈社会〉が〈教育〉を飲み込んだ時代の学校田園寮は、今後、教育概念的にも、また地域的、実態的にもさらに究明する必要があると考える。

47 村上俊亮〈ナチスと教育〉(「ナチス」所収)『教育学辞典』第3巻、岩波書店、1938、p.1787.

文 献

1. Deutsche Wissenschaft, Erziehung und Volksbildung, Jg. 1, H. 1, 5. 1. 1935.
2. Der Reichsbund der deutschen Schullandheime e. V. Illustriertes Handbuch. Kiel: Kunstdruck- und Verlagsbüro Kiel, 1930.
3. Eilers, Rolf: Die nationalsozialistische Schulpolitik : eine Studie zur Funktion der Erziehung im totalitären Staat. (Staat und Politik, Bd. 4), Köln: Westdeutscher Verlag, 1963.
4. Hilbert, Stephan Friedrich: Lesebuch Umwelt - Der Reformpädagoge Rudolf Nicolai. Norderstedt : Books on Demand, 2013.
5. König, Karlheinz: „Unsere Aufgabe ist die Erziehung unseres Standes . . . zu einem Werkzeug unseres Führers . . .“. Organisationsgeschichte, Konzeption, Praxis, Umfang und Wirksamkeit der Lehrerschulung im Nationalsozialistischen Lehrerbund (NSLB) zwischen 1926/27 und 1943/45. In: Jahrbuch für Historische Bildungsforschung, Bd. 6, Bad Heilbrunn: Klinkhardt, 2000.
6. Kraas, Andreas: „Den deutschen Menschen in seinen inneren Lebensbezirken ergreifen — Das Lager als Erziehungsform, 2011.“ In: Klaus-Peter Horn/Jörg-W. Link (Hrsg.): Erziehungsverhältnisse im Nationalsozialismus. Bad Heilbrunn: Klinkhardt, 2011.
7. ——— : Lehrerlager 1932-1945: politische Funktion und pädagogische Gestaltung. Bad Heilbrunn: J. Klinkhardt, 2004.
8. Scheibe, Wolfgang: Die reformpädagogische Bewegung 1900-1932. Weinheim/Basel: Beltz Verlag, 1969; 6. ergänzte Aufl. 1978.
9. Schmitt, Hanno: „Zur Realität der Schulreform in der Weimarer Republik“. In: Rülcker, Tobias/Jürgen Oelkers(Hrsg.): Politische Reformpädagogik. Bern: Peter Lang, 1998.
10. Scholtz, Harald: „Schule unterm Hakenkreuz“. In: Dithmar, Reinhard (Hrsg.): Schule und Unterricht im Dritten Reich. Neuwied: Luchterhand, 1989.
11. アドルフ・ヒトラー, 平野一郎 / 将積茂訳『わが闘争』下, 角川書店, 1973.
12. 石田勇治『ヒトラーとナチ・ドイツ』, 講談社, 2015.
13. 江頭智宏「1930年代ドイツにおけるシュールラントハイム」教育史学会『日本の教育史学』第46集, 2003.
14. 小峰総一郎「ナチス教員連盟について——組織ならびに教育活動——」『中京大学国際教養学部論叢』第12巻第2号, 2020/03.
15. ——— 『ナチスの教育——ライン地方のあるギムナジウム——』, 学文社, 2019.
16. ——— 「ラガー (Lager) ——ナチス「キャンプと隊列の教育」の展開——」『中京大学国際教養学部論叢』第10巻第1号, 2017/10.
17. ——— 「ライン地方のあるギムナジウム (5)」『中京大学国際教養学部論叢』第9巻第1号, 2016/10.
18. ——— 「ライン地方のあるギムナジウム (3)」『中京大学国際教養学部論叢』第8巻第1号, 2015/9.
19. ——— 『ベルリン新教育の研究』, 風間書房, 2002.
20. 寺崎昌男, 戦時下教育研究会編『総力戦体制と教育: 皇国民「錬成」の理念と実践』, 東京大学出版会, 1987.
21. 村上俊亮〈ナチスと教育〉(「ナチス」所収)『教育学辞典』第3巻, 岩波書店, 1938.

URL

1. König, Karlheinz: „Schullandheimbewegung und Schullandheimpädagogik im Griff des totalitären Staates (1933 - 1945)“. In: Verband Deutscher Schullandheime (Hrsg.): Schullandheimbewegung und Schullandheimpädagogik im Wandel der Zeiten. Hamburg: Verband Deutscher Schullandheime e. V., 2002, S. 61-136. In: https://ns-in-ka.de/wp-content/uploads/2017/04/geschichte_1933-45_landschulheime.pdf 最終閲覧: 2018/06/29 (pdf 版) .
2. https://books.google.co.jp/books?id=EL1Ft488hq0C&pg=PA61&lpg=PA61&dq=K%C3%B6nig+Schullandheim&source=bl&ots=47WdwqrNjq&sig=ACfU3U2Zejk4Yth9EPVqZp5F_hHqs5wcWg&hl=ja&sa=X&ved=2ahU

- KEwiHgNv58-fnAhUVyosBHY9wCocQ6AEwDnoECAoQAQ#v=onepage&q=K%C3%B6nig%20Schullandheim&f=false 最終閲覧：2018/06/29（書籍検索サイト，URL 版）。
3. <https://www.yumpu.com/de/document/view/21125668/schullandheimbew-egung-und-ns-in-kade> 最終閲覧：2020/02/27.
 4. Schäffer, Fritz: Nationalsozialistischer Lehrerbund (NSLB), 1929-1943. In: [https://www.historisches-lexikon-bayerns.de/Lexikon/Nationalsozialistischer_Lehrerbund_\(NSLB\),_1929-1943](https://www.historisches-lexikon-bayerns.de/Lexikon/Nationalsozialistischer_Lehrerbund_(NSLB),_1929-1943) 最終閲覧：2020/03/07.
 5. [https://de.wikipedia.org/wiki/Arthur_Hugo_G%C3%B6pfert_\(Politiker\)](https://de.wikipedia.org/wiki/Arthur_Hugo_G%C3%B6pfert_(Politiker)) 最終閲覧：2020/03/10.
 6. [http://saebi.isgv.de/biografie/Rudolf_Nicolai_\(1885-1970\)](http://saebi.isgv.de/biografie/Rudolf_Nicolai_(1885-1970)) 最終閲覧：2020/02/27.

(2020. 3. 24)